
World Of Awakening

九条 櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World Of Awakening

【Nコード】

N7664N

【作者名】

九条 櫻

【あらすじ】

オンラインゲームWorld Of Awakening

開発当初から世界中で話題になったそのゲームは、サービス開始半年後に起こったハッキング事件により、その時ログインしていた二千万人のプレイヤーがゲーム内に閉じ込められた。

……その事件から一年経った今でも、誰ひとりゲームからリアルに戻ってきた者はいない。

壊れた世界

今にも雨が降り出しそうな、雷鳴が鳴り響く荒野で自分は必死に足掻いていた。

「クソッ！」

苛立ちを内に溜め込まずに声へと変えて吐き出した自分は、手にした大鎌を振るう。

それは自分へと飛び掛かってきた四足の、体中から青みがかったドロドロの液体を滴らせたクリーチャー——ティンダロスの獵犬——を切り裂いて息の根を止める。

一撃で倒せる。つまり力の差は歴然。負けることはない。

……しかし、それは一対一ならの話だ。いくら相手が自分より遥かに弱いといっても、それがいくつも集まれば驚異的な力になる。そして自分は今、その驚異的な力をひしひしと実感している。

どこまでも続く平坦な荒野を自分を中心に、天と地が結ぶ果てまで埋め尽くしているのは、自分がさっきから相手にしているティンダロスの獵犬。

数なんて数えられるわけもない無数と言ってもいいほどの数が、自分だけに敵意を剥き出しにして襲い掛かってくる。

自分の手にした大鎌のもっとも適した攻撃範囲は一メートルから二メートル半の間。

二メートル半より遠くは、自分にとっても相手にとっても互いに干渉できない距離のため、あまり気にしなくてもいいのだが、逆に一メートル以内に入られるとすぐさま自分が不利に追い込まれる。

大鎌は近距離に近づかれると刃を当てるために短く持つか、距離をとるために自分が移動しないと攻撃できないし、近距離の戦闘が得意な相手だと圧倒的に不利に陥る。

しかし、だからといって今のような場合では、武器を短く持つと自分の武器の届く範囲が狭まり、相手の接近を許すことになる。かと

いつて移動するにも、移動するには他のティンダロスの猟犬に近づくなくてはいけないため、こちらは自分から相手に近づくことになる。だからこそ今のこの距離をこのまま維持しなければならない。……そうしなければ自分は死ぬ。

壊れた世界2

World Of Awakening

それが、総プレイヤー数が三千万人を越えた、日本だけではなく、外国でも人気のオンラインゲームの名前だ。

このゲームのプレイヤー数が三千万人を越えたのには、もちろんそれなりの理由がある。

「ゲームの世界に入り込むことができる」

ゲーム制作発表時に開発者から出たその一言は、世界の人々に大きな驚きと期待をもたらした。

当時、脳や脊髄から身体へと送られる信号を、コンピュータへと命令を出す電気信号に変えることで、仮想空間のもうひとりの自分を現実世界の身体と同じように自由に動かすことができるようになっていた。

五感も感じることができるようにもなっていたが、そのほとんどは医療目的に使われており、娯楽に使われることはなかった。

だからこそ、このゲームの話題はたちまち世界中に広がり、世界のゲーム好きは期待を胸に待続けた。

そして、制作発表から三年後の2021年にサービス開始。

開始一週間でプレイヤー数は、一千万人を越えた。

そして、ゲームの完成度と自由度の高さから、さらにこのゲームの話は広まり、二週間経たずにプレイヤー数は二千万人に達した。

……しかし、サービス開始から半年後に、ある出来事が起こる。

ハッカーにより、ゲーム内のノンプレイヤーキャラ“NPC”に組み込まれていた人工知能“AI”が暴走。ゲーム内のデータの改竄、破壊を行いはじめた。それにより、そのときログインしていた二千万人近くの人間がログアウトできなくなり、ゲームに閉じ込められ

た。

現実世界からの操作もできず、ゲーム全てがハッカーとNPCに支配された。

……それから一年。状況は何一つ変わっていない。

壊れた世界3

「はあはあ……」

無数のティンダロスの獵犬全てを倒した自分は、膝から地面に崩れ落ち、呆けた表情で空を見上げた。

さっきまでの低かった空は、今は灰色の雲の隙間から白い光が差し込んできていて、なんだか神秘的に感じる。

さすがにあれだけの数では、いくら戦力差があっても辛い。

このまま地面に倒れ込みたい衝動に駆られたが、我慢し、立ち上がる。

タウンとフィールドは転送装置を使わなければ行き来できないから、そこまで行かないといけない。

自分はゆつくりと歩きだした。

こんな生活がいつまで続くのだろうか……。

この世界に閉じ込められたときのことが脳裏に浮かぶ。

始まり

World Of Awakeningサービス開始から半年。

「これで……終わり！」

そう言つて、自分が振り下ろした大剣がクリーチャー——深きものども（ディープ・ワンズ）——の身体を切り裂くと同時に叩き潰す。

「——ッ！」

魚に手と足が生えた、人間のようにな足歩行する、一言で言つてしまえば魚人であるディープ・ワンズが、声をあげることもできずに絶命し、その身体が、薄っぺらいガラスが砕け散るようにバラバラになり空气中に消えていく。

そして、そこには戦利品である、青いビンでできた回復薬だけが残された。

自分はそれを拾い、栓を外すと一気に飲み干す。

カラカラだった喉が潤され、緊張感が解れる。

……本当にこのゲームは凄い。

半年間プレイしていてもそう強く思う。

今飲んでいるこの回復薬の冷たさや味まで感じる事ができる。

現実世界でできること、感じる事がそのままデータの中の仮想空間でもできたり、感じたり、本当に舌を巻く。

「……さて、そろそろ帰るかな」

同じような敵ばかりで飽きてきたことと、そろそろアイテムが所持制限に至りそうなので、クリーチャー討伐はそこそこにしてタウンへと戻ることにした。

始まり2

旅立ちの街アーカムに戻ってきて、ショップに寄った帰り、普段はあまり人のいない噴水広場に大勢の人が集まっていた。

「だから！ どうしてログアウトできねえんだよ！」

「その件につきましては、こちらでもまだ調査中ですので……」

内容はよく聞き取れないが、男の怒りに満ちた声と、その男を宥める、運営側であろうと思われるプレイヤーの声が聞こえる。

男の周りにいるプレイヤー達も、男と同じように、しかし男程ではないが、少々の怒りに満ちている様子だった。

「何だろう？」

誰かに聞こえるように言っただけでもないが、そんな呟きが口を出る。

「ログアウトできないんだって」

急にすぐ横から声がして、そちらを見ると、ウールでできたもこもこの服……というより羊の着ぐるみと言っても過言ではないものに包まれた小さい男のコがちょこんとそこに存在していた。

「……………なに？」

そのコがジトツとした目で自分を見てくる。

「えっ？ いや、なんでも……」

目を逸らして、頬を人差し指で掻きながら応える。

「ボクを見る目がキラキラしていたのは気のせい？」

「き、気のせい、気のせい……………そういえばログアウトできないってどういうこと？」

話をこまかすために話題をもとに戻す。

「言ったとおり。メニューの中にあるログアウトを選んでもログアウトできないんだよ」

重大な問題であるにも関わらず、慌てた様子も見せずに言った、さつきから無表情のままの少年は「確かめてみれば？」と続ける。

自分はその言葉に促され、ズボンからぶら下がっている、小さな鏡に手をかざす。

この鏡はプレイヤー全員が絶対に身につけているもので、これに手をかざすことでプレイヤーは、自身にしか見えないメニューウィンドウを開くことができ、それに触れることで武器、アイテムをその場に転送させたり、ステータスの確認などが行える。

自分はそのメニューの中で、ログアウトのボタンがある右下の端を確認し、その項目に触れる。

すると、ログアウトしていいかの確認ウィンドウが現れ、自分は“はい”と書かれたところに触れた。

そのウィンドウが消えた直後、自分の足元に、自分を中心に光輝く魔法陣が現れる。普通ならこのあと、この身体がその場から消え、急に意識が落ち、再び目覚めたときにはリアルの身体に感覚が戻っているはずなのだけれど……、

「……確かに不可能だね」

その魔法陣が消えても、自分は同じ場所に立っている。視界に写る世界はアーカムの街そのまま。周りの喧騒もそのままだ。

「……さて、どうしようか」

再び鏡に手をかざし、メニューを開く。

右上の端にある時計はまだ昼の一時を示したばかりだ。

別に自分はまだログアウトする気はないから直るのを待てばいいだけだ。

「……来る」

「え？」

隣にいた男のコが出した、その小さな声は、何故か、周りが五月蠅い中でも鮮明に聞こえた。

「来るって……、何が？」

「……お迎え」

理解できない答えが返ってくる。お迎えってどういう……、
そんな疑問が頭に思い浮かんだ直後、“それ”が起きる。
「うわっ！」

大きな揺れが世界を襲った。

揺れの強さが強すぎて立っていることも出来ず、ひざまずく。
周りを見渡すと、他のプレイヤーも自分と同じようにひざまずいて
いる。……自分の隣の男のコを除いて。

「……来た」

こんな状況でも無表情で、揺れにはまったくの関心も持たない男の
コが呟くと、その足元に青く輝く魔法陣が出現する。

あれはゲーム内転送用の魔法陣？ でもここには転送できるような
ポイントは存在しないはずじゃ……。

そんな思考中に、男のコの身体が魔法陣から放たれている青い光に
溶けていく。どこかに転送されるらしい。

周りのプレイヤー達も、男のコと同じように転送用の魔法陣で強制
的にどこかに飛ばされているらしい。ということは、きっと自分も
例外じゃないはず……。

予想は的中。

自分の真下に他のプレイヤーと同じ、青く輝く魔法陣が現れる。

一体何が……。

そんな思考もつかの間、魔法陣から放たれる青い光により、景色が
青一色に染まる。

……そして自分の身体は青い光に溶けていった。

始まり3

青に包まれた世界から解放され、さっきまでのアーカムと違う景色が視界に映る。

「ここは……どこ？」

まるで豪華なお城の大ホールのような場所だ。自分以外の転送されたプレイヤーもここに集められているらしく、とても多くの人でひしめき合っていた。

しかし、こんな数の人は今まで見たことがない。もしかしたらゲームをプレイしていた人間全員が集められたんじゃない……。

もしそうだとしたらここは広すぎる。街一個分ぐらいの大きさがあるかもしれない。

自分はここがどこか確認するために、メニューの中のマップ情報を開く。

「……？」

マップに表示されているこの場所の名前はアーカム。そして自分の位置を示すマークは、円形の形をしているアーカムの街の中央でチカチカと点滅している。

……これはおかしい。街の中央には大きな建物のポリゴンがあるだけで、そこに入ることなんてバグやチートでもしないとできない。それに、これだけの広さのホールをあの場所に作ったらアーカムの街の半分ぐらいの範囲を占領するはずだ。

「おい、クリユウ！」

そのとき、急に自分のキャラクター名が呼ばれて、自分はホールの内飾から人混みに視線を移した。

「こつちだ！ こつち！」

呼ばれたほうを見ると、防御面を全く考慮していないとしか思えない軽装に身を包んだ、自分と同じ年ぐらいの男がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

「どうしたの、リユート……。てゆーかそのポロシャツと半ズボンみたいな装備は一体……？」

「そんなことはどうでもいい。それよりこれはなんだよ？」

リユートのソレはどうでもいいようなことじゃない気がする。

「自分にもわからないって。あの偉そうに座っている人に聞けばいいんじゃない？」

自分は吹きぬけになっているホールの二階、テラスのように張り出している場所で、玉座に足を組んで座っている男を指差す。

「とりあえず、あの人は何か知ってるんじゃないの？」

あんな場所にいるんだ、きつとこのことには関係しているはずだ。

「そうだな！ 確かになんか知ってそうだな！」

一人納得したリユートは、その人物の方を向くと、

「おい！ そのアンタ！ これはなんだよ！？」

ここにいる全員の気持ちを代表した質問をその男に向かって放つ。

……リユートって扱いやすい。

「……世界は変わった」

男は口を開いたが、その口から出た言葉は、リユートの質問に対する答えではなかった。

「世界が変わったって……？」

あの人物は一体何を言っているんだ？

「……世界は変わった。新たなる、目覚めの世界へと」

始まり4

「ゲームマスターの名のもとに、ここに新たな世界のルールを説明する」

自分のことをゲームマスターと名乗った男は玉座から立ち上がると、数歩前に出て、見下すような視線で自分達プレイヤーを見下ろした。
「……もうわかっていていると思うが、ゲームからのログアウトを禁止した」

その言葉に、怒りを見せ、文句を言うプレイヤーが増える。

「なんでそんなことすんだよ！」

「そうだ、そうだ！」

「俺達を早くリアルに帰せ！」

まるでテレビとかで見る、デモンストレーションみたいな騒がしさだ。

「……帰りたいなら、こちらの出す条件をクリアすること。それが唯一、ゲームからリアルに戻るための条件だ」

そんな騒がしさもなんのその、ゲームマスターは淡々と告げる。

「ゲーム？」

一体ゲームマスターは何がしたいんだ？

自分にはわからない。

ゲームをクリアしたら解放するだなんて……。なんのためにこの世界にプレイヤーを閉じ込めたんだ？

「……条件は至ってシンプル。この世界の邪神をすべて倒すこと。ただそれだけだ」

「そんなもん知るか！！今すぐお前を叩き斬ってやる！！」

プレイヤーの一人がそう叫ぶと、持っていた大剣を力強く握り、ゲームマスターに向かって跳躍した。

そしてそれに続くように、弓や銃、さらに様々な種類の魔法を放つプレイヤーが現れる。

……しかし、その攻撃がゲームマスターに届くことはなかった。

なぜなら、大剣を持ったプレイヤーがゲームマスターにあと少しで届くといったときに、上空から一人の人物が現れ、そのプレイヤーに踵落としを決め、さらには飛んできた攻撃すべてを、手をかざしただけで打ち消したからだ。

突如現れた男は、空中に浮かんだまま、ゲームマスターと同じように、無表情のまま見下すように自分達を見下ろしている。

「アイツは……」

その男には見覚えがあった。

紺色のコートを羽織り、腰のベルトには長さの違う二本の刀。背中には折り畳まれたコウモリのような細い翼。

アイツは確か……。

「……我は旧支配者の筆頭、クトウルフ」

その男が口にした名前が、自分の中で思い出した名前と一致する。旧支配者。

この世界の神を三つの分類に分けたときのひとつ。構成はほぼ邪神によって成り立っていたはずだ。

クトウルフは海底都市ルルイエのエリアボス。

あのエリアは、難易度が異常に高く、この半年でクリアできたのはただひとり、自分だけだ。

そんなボスがどうしてここに？

プレイヤーを見渡していたクトウルフと目が合う。その瞬間、無表情だったソイツの口の端が僅かに上がった。

それでわかる。アイツは自分に復讐しようとしている。

「……クッ」

クトウルフに踵落としを決められたプレイヤーが起き上がってきた。

この世界に“痛い”という感覚はない。触感を感じられるが、コンピュータが痛みに繋がると判断したものは、感じる事が出来ないようになっている。

しかし、そのプレイヤーの苦悶の表情からは、体中に走るのであろう

痛みがひしひしと伝わってくる。

「どう……なつてんだよ……？」

そのプレイヤーがゲームマスターを睨みつける。

「そういえば……ルールの改変を伝えるのを忘れていたな」

ゲームマスターはその視線に動じることもなく、新たな世界のルールをここに宣言する。

「この者を見ればわかると思うが……この世界に“痛み”を再現することをコンピュータに反映させた。……そして、」

そこで区切られた言葉の続きは、自分の予想していたどおりの言葉だった。

「……この世界で死んだ者は、リアルでも死を迎える」

始まり5

「……この世界で死んだ者は、リアルでも死を迎える」

その言葉を認めた者は絶句を、受け入れられない者は、

「そ、そんなの有り得るか！ 嘘に決まってるッ！」

といったように、ただ喚く。

自分は前者だ。これだけのことをできるならば、それすら簡単にできるだろう。……絶句はしてないが。

自分はメニューウィンドウを開くと、“魔法”と表示されたところに触れ、その中の転移の魔法を選択する。

転移の魔法は、任意の場所に自分を移動させる魔法だ。魔法のレベルにより転移できる範囲が広くなる。

……ちなみに自分が選んだ転移場所はゲームマスターの真後ろ。

自分は一瞬にしてその場所に転移する。

「こんにちは、プレイヤーさん」

自分が転移した直後、真後ろから嘲笑を含んだ言葉が聞こえてくる。そして、自分の喉元には、小さなナイフの切っ先が突き付けられていた。

「……驚かないんですか？」

「別に。こうなるだろうとは思ってたから」

「面白みのない人ですねえ」

後ろの人物はつまらなそうな声で、しかし若干楽しそうに呟くと、ナイフを喉から離し、自分の前へと移動した。

「誰？」

見たこともない人物に対しての疑問が口が出る。

見た感じや話し方から、人当たりのいい大学生みたいな印象を自分は持った。

「お教えしましょう。ワタシは“這い寄る混沌”ニャルラトテップ。普段は“原始の混沌”に仕えています。現在はゲームマスターに仕えています」

「……無駄話の過ぎる執事みたい」
思ったことをズバリ言う。

顔立ちは二十歳ほどの青年。敬語を使っていながらへらへらした喋り方をしていたのでそんな感じがした。

「これはこれは痛い指摘を。……まあ、そのまんまその通りと言っても過言ではないんですけど」

ニャルラトテップは薄ら笑いを浮かべながら、自分の周りを歩きはじめる。

「……NPC？」

疑問がよく無意識に口から出る……自分の悪い癖だ。

「そうですね。ワタシはNPC。外なる神の一人です」

「そんなふうにまったく見えない。人工知能ってこんなに凄いんだ」
「それならワタシも貴女には驚かされてますよ。ゲームを始めて半年でクトウルフを倒せるなんて……さすが三大プレイヤーの一人」

ニャルラトテップが一瞥したクトウルフは、ゲームマスターが新たな世界のルールの説明をしている隣で目をつむり、ただ静かに浮かんでいる。コウモリのような細い翼は畳まれたままで、それによって浮かんでいるわけではないらしい。

「……で、何をする気？」

本題に入る。

「そんなの教えられるわけじゃないですか。それに……」

「それに？」

「貴女は別にこの世界から出られなくてもいいんじゃないんですか？」

「……どういうこと？」

「わかっていくくせに。自分の心に聞くんですねえ」

ニャルラトテップは嫌らしい笑みを浮かべる。

「とりあえず今は、貴女をアーカムに戻して差し上げましょう。貴女は他のプレイヤーみたいに馬鹿ではないようですし」

さらに意地悪に微笑んだニヤルラトテップは、綺麗なお辞儀をする
と、指をパチンと鳴らす。

すると、それが合図になっていたかのように自分の足元に魔法陣が
現れた。

「またいずれお会いしましょう」

そして、自分は望まぬ転送により、強制的にアーカムへと送り付け
られた。

リアル

「おい、何か言えよ」

「……………」

「チツ、だんまりかよ。マジうぜえな、コイツ」

私を囲むように三人の男子が、一人はイラついて、二人はニヤニヤと笑いながら立っている。

ウザいなら絡んでこなきゃいいのに。早くどっかに散ってくれないだろうか……。

「お前って人をイラつかせる名人だな」

呆れたような言い草で一人が言った。……どっちがだ。

いつもいつも絡んできては勝手にイラついて、それで文句ばかり言ってくる。

本当にイラつく。

こんな奴らは例えいくら集まろうと結局は弱いままだ。集まって強くなったと思いつ込んでいたただのザコだ。

「おい、喋れよ。つまんねえだろ？」

自分のほうが立場が上だと言わんばかりの発言に、さらにイライラしてくる。

「おい、」

バンッ！

男子の一人が何かを言おうとする前に、私は机を勢いよく叩いて立ち上がった。

急に大きな音が発ったことで、教室中のみんながこちらを向く。

「な、なんだよ？」

さっきまでひとりでベチャクチャ言っていた男子が数歩退いた。

この行動一つで、コイツがいかにか弱いかが手に取るようにわかる。

どうせ自分より弱いと認識した奴にしかでかい態度がとれないゴミ
みたいな奴だ。

「……………」

私はソイツの問いに答えることもなく、教室から出ていく。

もう授業が始まるが、こんな奴らのいるところにいるなんてまっぴ
らだ。コイツらと関わらなくていいなら成績がいくら下がろうと全
然構わない。

……こんな世界、私には必要ない。

決意

「……………最悪な夢だ」

目覚めは相当悪かった。

あんな夢を見るなんて本当に最悪だ。

「おはようございます、クリユウさん。爽やかな朝ですねえ」

「……………ケンカ売ってる？」

自分は、部屋の入口の扉に寄り掛かっているニャルラトテップを睨みつける。

「そんなことはありませんよ。ティンダロスの獵犬をあれだけ倒して疲れて果てている貴女にケンカなんて売るはずないじゃないですか」
「以前と変わらない、そのへらへらした感じが相変わらずイラツとくるんだけど……………」

「残念ながらこれはどうしようもないですよ」

残念ながら、とか言いながらとても嬉しそうなのがム力つく。

「……………それより、勝手に人の家に入ってきて何の用？」

ここは自分のマイホームだ。

持ち主がキーを渡した相手しか入れない設定だが……………ゲームの支配者側の存在には、そんなこと関係ないのだろう。

「そうでしたそうでした。貴女と話していると面白いので、ついつい目的を忘れてしまいますよ」

自分の知ったことが。

「早く用件を言え」

「会った当初より短気に、さらに男勝りになりましたねえ。もともと男の子っぽかったですけど、これじゃあさらに間違われますよ。見た目も見た目ですし」

「うっさい、黙れ」

「おお、こわいこわい」

「……………本気で一発殴りたい」

疲れてるときにこんなやつに絡まれるなんて……運がない。

「貴女をからかうのも楽しいですが……まあ、真面目な話に戻しましょうか」

「寝たいから短めで頼むよ」

「いいでしょう」

そう言っただけでニャルラトテップは語りだす。

「この世界が変わってから一年。こちら側が出した助かる方法は邪神を殺すことでしたが、今日までに殺された神はたったの二体。そして死んだプレイヤーは三百万人です」

「……それを自分に言っただけでどうするの？」

「ヒドイと思いませんか？ 一年でたったの二体……いくらなんでも少なすぎでしょう。人間とはこの程度なのかと幻滅ですよ」

「共感が得たいなら、他を当たってもらえると助かるよ」

自分はそれだけ言っただけでベッドに再び横になる。

「そんなにワタシがお嫌い？」

「大っ嫌いだよ」

「そう言ってる割には実は好きだったり」

「首を刎ねるぞ」

「ワタシは貴女が大好きですよ。心身ともに」

「気持ち悪いこと言わないでくれる？」

「まあまあ面白い受け答えですね」

ニャルラトテップはにこやかな笑みに乾いた拍手を数回する。

「なんだか子供扱いされてる感じがしてウザい。」

「話が終わったなら帰ってくれ」

「貴女はリアルに戻りたくはないんですか？」

「一年前に、自分に向かって戻らなくてもいいとか吐かした奴はどこのどいつだったけ？」

「あれは撤回します。貴女がいなくても神が減びるだろうと思っていたワタシの間違いでした」

「それは残念だったね。じゃあおやすみ」

「可哀相ですねえ、“妹さん”」

すべての言葉を受け流すつもりだった。しかし、私は最後の一言を聞いた瞬間、一瞬という言葉のとおり、瞬きする時間も与えない速さでニヤルラトテップの首元に虚空から出現させた剣の切っ先を向けていた。

「どうやって知った？」

「こちらはプレイヤー全員の登録された情報を手にしているんです。だから調べるのなんて簡単なことですよ」

“這い寄る混沌”は意地汚い笑みを浮かべ、勝ち誇ったような顔をする。

「貴女がこの世界ですることは一つ。神を殺す。そして貴女を待ち続けている妹さんのもとに帰ることです」

「まずはアンタを殺してやる」

「それはまだです。しかし、いずれにせよ、その時は訪れますよ」
そう言うとなヤルラトテップは世界に溶け込むかのように消えていなくなった。

「クソッ！」

掴んでいた剣を力任せに床にたたき付ける。
いままでにここまでムカついたことはない。あんな学校に行ってもまだ。

私はあんなやつが言ったことに従うしかないのか……。

「……冷静になるんだ、自分。あいつの言いなりなるんじゃない。リアルに戻るため、自分の意志で神を殺すんだ」

心の中での自分の呼び方が“私”になっていたことに気づき、“自分”に戻る。この世界では、自分は“自分”だ。

「……行こう」

自分はマイホームという狭い空間を出て、広大な世界へと足を踏み出した。

……神を殺すために。

情報収集家“リユート”

「神のいる場所を教えろ？」

リユートはしばらく考えるように唸ったが、何かを理解したかのような顔を自分に向け、

「クリユウ。お前頭でも打ったのか？」

「……………」

とりあえず自分は剣の平らな面をリユートの頭にたたき付けた。

「痛ッ！」

「リユートが悪い」

頭を押さえて足をばたさせているリユートを尻目に、自分はリユートの向かいの席に座り、テーブルにおいてある残り少ないオレンジジュースを飲み干す。かなりおいしい。

「あつ！ 俺のオレンジジュースなに勝手に飲んでんだよ！」

「別にいいじゃん」

「よくねーよ！ 自分で買えよ！」

なんかすごい喚いてるけど、オレンジジュース一つでなにムキになっただか。

「このオレンジジュースになんかあるの？」

喚くほど飲まれるのが嫌だったなら、これに何かがあるのかな？

「いや、別になんもない」

しかし、リユートは、いままでの言動が嘘みたいにあっけらかんとそう言うのと、「オレンジジュースもう一つお願いします」と、近くを通ったウェイトレスに注文した。

「……剣が恋しい？」

自分は再び剣の平らな面をリユートの頭上に持つていく。

「言っておくけど、それ結構痛いからな」

「大丈夫。リユートの装備してる海賊みたいなバンダナがきつと衝撃を和らげてくれるから」

リユートに向かって諭すようにそう言い、自分は柄を握る力を弱めた。

それにより重い刀身が傾いて、リユートの頭に当たる。

「大丈夫じゃねえ！ 普通にいてえ！」

「で、神に関する情報だけ……」

「無視かよ！？ 無視すんな！」

ツッコミ大好きリユートは反射的にツッコミを行っているけど、ここは喫茶店だから静かにしてほしい。周りの客から変な目で見られてるし、ウエイトレスは呆れてるよ。

「リユート静かにして。他の客に迷惑だから」

「誰のせいだよ、誰の」

ブツブツ文句を言いながらもリユートは静かになった。

「……本題に戻るけど、情報をもたらえる？」

「本当にやる気か？」

リユートは真剣な表情で問い返してくる。そこには親友のことを心配してくれている気持ちが含まれていた。

「やる気だよ」

「……そっか」

自分の顔を見たリユートは、自分の決意の気持ちを理解したらしく、僅かな笑みを見せる。

「やり遂げるよ！」

「もちろん！」

自分とリユートはお互いに手をガッシリと握り合う。

そんなことは百も承知だ。そのためにリユートを訪ねたのだから。

「それじゃ、情報をくれる？」

「わかったけど、まずどの神を殺しに行くかだ。……そうだな……」
リユートは七分丈のズボンのポケットから小さな手帳を取り出すと、パラパラとめくりはじめた。あれはリユートがゲームを始めたときから使ってるメモ用の手帳だ。残しておいたらいいと判断した情報が書き留めてある。

所持者本人がいろいろと情報収集をしているため、なかなか使い物になる情報が記されていることが多く、彼から情報を買うプレイヤ―もかなりの人数がいる。

巷では、「とりあえず情報が欲しいときはリユートにあたれ」と言われるほどに信用されているらしい。

「ん、こいつとかにしてみるか？」

リユートはそう言うと、手帳のページを自分のほうへと向けた。ぎっしりと文字が書かれた中の一カ所をリユートは指さす。

自分はその名前を呟いた。

「……ゴル＝ゴロス」

ディア

「ゴル」ゴロスはアンタルクトス山の地下にいるらしい。俺の聞き込みによると、いままでそこに向かったプレイヤーは二百人ほどで、帰ってきたのは四人だけだ。しかも四人ともボロボロになつて逃げ帰ってきた。そんなに知られてないし旧支配者の中で上位じゃないけど、それでもそれだけの力はある。……まあ、クトウルフを一回倒したクリユウなら大丈夫だとは思うけど一応気をつけるよ」

「わかった。それじゃあ行ってくるよ」

リユートと別れた自分は、アーカムでアンタルクトス山に行くための準備をしていた。

そこまで必要はないと思うが、一応念のためだ。

「とりあえず回復アイテムだけは買っておこう」

そう思つてショップに向かおうとしたとき、

「あ———っ！ クリユウだ———っ！」

背後から、とても明るい少女の声が聞こえた。

振り返ると、こちらに向かつて全力疾走してくる女の子が……。

そのコはスピードを落とすこともせず、その勢いのまま自分の胸辺りに突っ込んできた。

その勢いに負け、地面に尻餅をつく。

「いててて……」

「んっ、クリユウいい匂いっ」

「……離れてよ、ディア」

軽そうで動きやすそうな鎧を装備したそのコ——ディアは自分の胸に顔を擦り付け、クンクンと匂いを嗅いでいる。

寝癖のようにクシャクシャの髪は、勢いよく燃える炎のようなオレ

ンジ色。そしてそれに相反するかのように瞳の色はスカイブルー。
違和感バリバリ。

年齢は自分と同じらしいが、クリエイトしたキャラの見た目は歳よりも二歳ほど幼い。

ついでおつむのほうも歳に反して幼い。子供みたいなことをよくやる。

見た目どおり明るくて、ムードメーカーなディアだけど、空気が読めないのが少々問題だ。

「いい匂い」

相変わらず自分の匂いを嗅いで幸せそうな顔をしている。自分の言った言葉は耳に入っていないらしい。こういうときは力でどうにかするしかない。

「はい。離れる」ディアを自分の身体から引きはがし、再び抱き着こうとしないようディアの肩をしっかりと掴んでおく。

「なんで離すの？ クリュウのペチャパイに顔を埋めさせてよ」
「……………」

このコは本気で殴られたいのかな？ ならお望み通りに……。自分はディアの頭よりちよつと上に握りこぶしを作ると、それはもう腕の力を目一杯に使って振り下ろした。

「いった——いつ！」

ディアが頭を押さえてしゃがんだけれど、自分はそれを特に気にすることもしせずに歩きだす。

「放置は酷いよ」

なんか声がした気がするけど、きのせいきのせい。これから神を殺しに行くのにムダに精神を疲れさせるわけにはいかない。

「くっそ〜！ これでもくらえ〜！」

またまた背後から大きな声が聞こえると、背中がズツシリと重くなった。

「……重っ」

「なっ！ 重くないよ！ アタシの体重はリング三個分だよ！」

「倒れる！ 倒れるから暴れないで！」

背中に飛びついてきたディアが暴れるので、重心が取りにくくなつて何度か倒れかける。危ない。

「離れて！」

「イヤだっ！」

「離れろーっ！」

「イ——ヤ——ッ！」

そんなやり取りの最中、ディアは両腕を自分の首に巻き付け、両足を腰に絡みつかせ、背中から簡単には剥がせないだろう状態になつてしまった。

「これでもうクリュウはディアちゃんを降ろすことが出来ないよ！」
見えないけど、得意げな表情をしているのが容易に目に浮かぶ。
しかし、いい気になれるのもそこまで。

「離れないと撃つよ」

自分は一丁の銃を、自分の頭の真後ろにあるディアの頭に押し付けた。

「う、撃てるわけないよ！ ク、クリュウはこんなおふざけで人を殺せるような人じゃないもん！」

強気を出して言ってるけど、声が震えてるよ。

「確かに頭だと死んじゃうけど……」

自分は腰に絡み付いている足を掴んで、そこに銃口を向けると、

「足なら死なないもんね」

「爽やかにそんな恐ろしいこと言っちゃダメ——ッ！」

自分にしがみついていたディアは、自分への拘束を解くとさらに数歩後ろに離れる。

まだこのゲームが普通だったときは、面倒臭かったら躊躇もなく発砲してたんだけど……。

……まあ、今はそんなことできるわけないからせいぜい脅すくらいかな。

「それじゃ、自分は行くところがあるから」

それだけ言つて、自分はシヨップに向かうことにする。

「どこ行くの〜?」

「シヨップだよ、シヨップ」

「アタシも行く〜!」

また面倒臭いことを……。しまいにはアンタルクトス山までついて来るとか言い出すよ、絶対。

「ダメだよ」

「イヤだ。行く」

「あつちでわたあめ売ってるつて」

「じゃあねクリユウ!」

さつきまでまとわり付いてきたのが嘘みたいに、ディアは、「わたあめ——っ!」と叫んで、自分が指さしたところに走っていった。

なんという切り換えの早さ。わたあめであそこまでテンションが上がる十七歳は見たことがない。

「さて。買い物してゴルゴロスを倒しに行こう」

面倒臭かったけど、なんだかんだで緊張感がなくなっていたことはディアに感謝しておこう。

.....。

ディアを眺める。

わたあめをととても嬉しそうに食べている姿は幸せそうだった。

この世界に閉じ込められたときに泣きじゃくっていたのが、つい最近のように感じる。今、あんなに明るく振る舞っているのは、心の

奥底の不安や恐怖を表に出さないように頑張っているからだ。

だから、自分もディアと話したりするときは、できるだけ楽しく、明るくしようと努力している。

.....でも、

「.....」

..... どうして自分は一年前、泣いていたあのコを救うために神を殺しに行かなかったのだろうか.....。

答えは考えなくてもよくわかっている。

自分は……結局は逃げていたんだ。この世界に逃げてからもまだ……。

「……自分はもう逃げない」

自分が神を殺すのは妹のためだけじゃない。この世界にいるみんなを救うことと、いままで逃げていた自分への決別だ。

……まず殺す神は、アンタルクトス山のゴル＝ゴロスだ。

アンタルクトス山：外部

アンタルクトス山。

標高千五百メートルぐらいの山で、岩肌のところどころには雪が積もっている。

山のさらに上にある鈍い灰色の雲は、今にも雨や雪が降り出しそうな雰囲気だ。

「……少し肌寒いかな」

下は長ズボン、上はアンダーシャツにフード付きのローブを着ているだけという薄着だけれど、風景に見合わずそこまで寒くない。

実際の世界でこのような風景の場所に今の服装で行ったら、凍えて身体の震えが止まらないはずだ。

しかし、このゲームはそこまでの再現はしていないらしい。

世界が変わったときに痛みを感じるようにされたが、気温などのプレイヤーの感覚ではない設定はいじられていないのだろうか？

そんな疑問を持ちながら、自分は山の中へと続く穴を眺めていた。

光になるようなものはなにもなく、ただ黒い穴がぽっかりと口を開け、自分が入ってくるのを待っているように感じた。

「明かりがいる」

自分は、ズボンからぶら下がっている鏡に手をかざし、メニューウインドウを開いた。

時刻を確認すると三時になる少し前。できれば早めに終わらせて、暗くなる前にはアーカムに帰りたい。

そんなことを思いながら、光を作り出す魔法を見つけて選択する。

発動してから手の平を天へ向け広げると、そこに直径五センチの光の球が出現した。

強烈な白さで光るそれは、自分の頭付近に浮かんでいくと、ゆらゆらと空中を漂いはじめる。

洞窟などの暗い場所を探索するのに必要不可欠な魔法だ。これがな

いなら、洞窟探検なんて不可能と言ってもいいだろう。

「これでよし……と」

一人納得して洞窟に入ろうとする。

しかしそのとき、けたたましい鳥の鳴き声が空に響いた。

「この声は……」

空を仰ぎ見ると、一羽の巨大な鳥がこちらに向かって飛んでくるのがわかった。

ゴル●ゴロスに仕え、この山の入り口を守る鳥——シヤンタク鳥。

鮮やかな緑色の羽根が美しい鳥だが、見つけた獲物には容赦なく襲い掛かる凶暴なクリーチャーだ。

空中を飛び回る相手に近距離戦用の武器は向かない。だからここは、遠くにいる敵にも攻撃できる武器を選ぶ。

自分は虚空から弓と矢を取り出す。

自分の身長より少し短い、漆で塗ったような黒い金属を複雑に絡み合わせた弓に、同じように漆黒の色をした矢を一本つがえる。

無駄な時間と体力を使うわけにはいかない。一撃で仕留めてみせる。片目を閉じ、意識を集中させ、放たれる矢が描く軌道を予想し、一番威力が高くなるところで射ぬけるように思考を巡らせる。

狙うのは、獲物を見据えている鋭く朱い瞳。その瞳を血の赤で染めてやる。

空中のハンターは、幸いなことに自分の様子を見てもそのままこちらに向かってくる。そこはやはり低能な人工知能か。

自分は限界まで引き絞った矢を……放つ。

それは自分の計算どおりの軌道を描き、そして一番威力が高くなったところでシヤンタク鳥の左目に突き刺さった。

シヤンタク鳥は悲鳴を上げながら、地面へと落下する。

……まだ終わりじゃない。

目を射ることはせいぜい相手の動きを止めるくらいだ。命を断つまでには及ばない。

だから、起き上がる前にトドメを刺す。

自分は弓をしまうと同時に、鉄で作られた、長さ二メートル、刀身の幅四十センチの巨大な剣に持ち替える。

……これで終わりだ。

自分はその剣を自分の頭の上まで持ち上げると、身体を起こそうとしていたシャンタク鳥へ振り下ろした。

切ることよりも潰すことに重点をおいた剣は、グシャリと肉を潰し、その奥の骨を砕く。

起き上がるうとしていた巨大な鳥は、再び地面へと倒れ込むと、ぴくりとも動かなくなつた。そして、その身体は細かい破片と化し、風で飛ばされる砂のように、ばらばらと世界に消えていく。

自分はその様子を最後まで見ずに、洞窟の入口へと向かった。くだらないアイテムに用はないし、目的はこの中だ。

洞窟内に足を踏み入れる。

光が照らす洞窟の中は、入り組んでいて、ゆっくりと下に向かっていた。

ここからは気を引き締めて行かないと。転ぶわけにもいかないし。自分は慎重に足元に注意しながら洞窟の奥へと進んでいった。

アンタルクトス山：内部

「はぁ……」

疲れの込もったため息をつきながら、自分は近くにあった、あまりゴツゴツしていない岩に腰を掛ける。

ズボンが岩についた水分を吸い取り、嫌な感触が肌に伝わってくる。パンツも濡れたな、コレ。

洞窟に入って十五分。

奥へ進めば進むほど、洞窟内の壁や床が目に見えて濡れていき、今では少し運動するだけで汗が湧いてくるほどの湿気が身体中を覆っていた。

「気持ち悪い……」

アンダーシャツは汗でべったりと肌に張り付き、臀部が感じてるのと同じぐらいの不快さを提供してくれている。有り難いことこの上ないね。

水分相手に皮肉ってる自分に「何してんだか」と呆れつつ、この十五分間を思い出した。

転びかけること三回、転んだこと五回。

……うん、ドジだね自分。自分で理解できるぐらいドジだよ。悲しいね。

「普通に見てる分には強くてクールでカッコイイの星三つだけど、関わりを持つとドジ成分が滲み出てるのがわかってくるよね、クリユウって。……はぁ」

赤髪青目のお子様高校生にそう言われて、最後には呆れたため息もされたあの時の悲しみがふつふつと蘇ってくる。

「……これ以上考えたら落ち込みそう」

そう思っ、転ぶ度を感じていたあの虚しさを振り払い、この十五分間で気になったことを考えることにした。

「……どうしてクリーチャーが一体も出てこないのかな？」

洞窟に入ってから自分は一度も戦闘を行っていなかった。

最初は敵が出現しないエリアかと思ったが、ところどころにあった広く開けた空間は敵と戦うためのフィールドにしか思えず、なにも起きないその空間に対して不安まで感じてしまった。

「……………はあ」

疑問が頭の中を巡る。まるで誘い出されてるような気がしてならない。

だが、罠があるうとなかろうと自分は奥に進むしかない。自分は必ずリアルに帰る。

何度も固めてきた決意を再び固めた。そうすることで、どんなことにでも立ち向かっていけるような気がするのだ。

自分は岩から腰を上げる。休憩終了つと。

立ち上がった時に、濡れた下着とズボンが肌に張り付く。

「うゝん、気持ち悪い」

自分はズボンを引っ張って、できるだけ肌に当たらないように調整してみる。しかし、ズボンの大腿部の裏側は全体的に湿っていて、いくら頑張ってもどこかしらが肌に張り付く。完全に当てないようにするのはムリかも。

「ここまで再現する必要はないのに……………」

ゲーム製作者に悪態をつきながら自分は洞窟の奥へと歩きだした。

ゴルⅡゴロス

洞窟の終わりは突然だった。

洞窟内を奥に進むに従って一本道が狭くなっていくと思っていたら、曲がり角を曲がったところで急に円形の開けた空間に出た。奥行きは二十五メートル、高さは約十メートルに満たない空間で、さっきまでの湿気が嘘のように空気が乾いている。そして、まるで電灯が点いているかのように暖色の光がこの空間を照らしていた。

……そこまで重要じゃないが明るいのは助かる。

自分は空中を漂っていた光る球体を握る。手を開くと、そこにはなにも残っていないかった。

「さて……」

“私”はこの空間の奥に目を遣る。ここからは本気でいかないと。

「いつでも戦えるよ」

「クスクスクス。無駄話一つする気もないんだね」

壁に接して置いてある、真っ黒な石でできた重厚な椅子に座っていた人物——ゴルⅡゴロス——が、控えめの嘲笑のような笑みを見せながら私を見据える。

「でもその前に……」

十歳ほどの子供みたいな容姿をしているゴルⅡゴロスは椅子のひじ掛けにひじを立て、手の甲で頬杖をつくとき、目を細め、見定めるような視線を私の身体に送ってきた。観察でもしているらしい。

別に見られるのは構わないが、見るだけでなにかがわかるのだろうか……。相手の強さでもわかる何かしらのシステムでもあるのかもしれない。

「うーん……………」

私の観察を終えたゴルⅡゴロスは暫しの間腕を組んで悩む素振りを見ると、その後呆れた顔をして、

「まだまだ弱いね。もっと強くなってもらわないと」

とそれだけ言つて、明らかに不満げに肩を落とした。

私はその言葉に、

「あっそ」

と投げやりな答えを言い放つ。

別に相手が自分のことをどう思おうと自分には関係ない。どうせコイツはここで死ぬから。

「うへー、つまらない反応」

ゴル「ゴロスはマズイものでも食べたあとみたいな不愉快そうな顔をする。

「でもそれがクリユウらしいや。クスクスクス」

しかし、次には開き直ったように笑い出した。私の名前を知っているのは、あの変態執事が教えたからかな？

「話は終わり？ 終わったなら……」

私は背中に備え付けた武器を取るようにして、虚空から自分の身体の倍はある大剣を出現させる。

刃の形は三角形で、両刃は触れただけで切れそうなほど鋭い。その凶器を構える。

「死ね」

自分でも驚くほどの低い声でそう告げ、ゴル「ゴロスへ向かう。すぐに終わらせてやる。

自分がいた地点とゴル「ゴロスがいる地点は十メートルほど離れていたが、自分はそれを三步で二メートルまで縮めると、地面を踏み締める力と遠心力を使って、座っているゴル「ゴロス目掛けて三メートルを越える大剣を薙いだ。

空気を切り裂きながら、大剣がゴル「ゴロスを二つに断ち切ろうとその身体へと向かう。この威力ならば並大抵の防御なら打ち崩すことができる。

「クスクス」

しかし、相変わらずの嘲笑を浮かべるゴル＝ゴロスは、人差し指と中指二本を迫りくる刃に向けると、

たった二本の指でそれを掴んだ。

「なっ!？」

自分の攻撃がいとも簡単に防がれ一瞬驚いたが、このままだと危険だと判断し、一旦態勢を整えるため距離を置こうと剣を力任せに引っ張る。

「——っ!？」

だがしかし、私は再び驚いた。

武器が……動かない!？

大剣は空気中に縫い止められたかのようにぴくりとも動かない。どんなに力を加えてもゴル＝ゴロスの指から離れる気配を見せない。

「あつれ〜？ 固まっちゃってどうしたのかな〜？ 動かないの〜

？ クスクスクス」

動きたくても動けないのがわかつているはずなのに、目の前の神は意地汚い笑みを浮かべながら知らないふりをする。

その態度に、私の中の黒い殺気がわき起こる。コイツは絶対に殺す。

「お〜、怖い顔。言っておくけど力任せじゃ僕は倒せないよ。クスクスクスクス」

ゴル＝ゴロスはニツコリと笑うと、指で掴んだ大剣を軽々と空中へと放り投げた。

剣を掴んでいた私自身も宙に浮き、完全な無防備になる。今何かが来たらマズイ。

「クスクスクス」

浅ましい笑みを浮かべながら、ゴル＝ゴロスが掌を私に向けて突き出した。その周囲に何本もの、鍾乳石のように尖った二メートルの

石が出現する。あんなのが刺さったらひとたまりもない。痛いじゃ済まない。

「クスクスクス。死んじゃえ」

その声を合図に、その石の柱が私目掛けて迫りくる。

「そんなのでっ！」

空中で体をよじり、ゴル「ゴロス」に向けて手を突き出す。

持っていた大剣から二丁の銃へと持ち替える。

「やられるかっ！」

私は迷うこともなく、手にした銃の引き金を何度も引いた。

銃口から出た弾は石柱すべてを打ち砕く。こんなのでやられるほど

私は弱くない。

「ヒュー、やるねえ！ やっぱ戦いはこうでなくっちゃ！ クスクスクス」

「……その意地汚ない笑みを私に見せるな」

石柱すべてを壊した私はゴル「ゴロス」のその顔目掛けて銃を二回発砲する。

「ダメダメ。そんなの当たらないよ」

私の放った銃弾は、うんざりした様子のゴル「ゴロス」の目の前に突如地面を突き破り現れた石の壁によって防がれた。

銃弾によって石の壁が砕け、ゴル「ゴロス」の顔が見える。意地汚い笑みを浮かべた子供の顔が……。

くそっ。どうする……。遠距離からの攻撃も近距離からの攻撃も防がれる。どうすればアイツに攻撃が通る……。

地面に降り立った私はゴル「ゴロス」を見据える。

「クスクスクス。僕に攻撃が当たらなくてイラついてるね。見ておもしろいよ。クスクスクスクスクス」

……絶対殺す。もう何度言ったかわからないけど絶対殺す。

とりあえず、試したいことは試す。可能性がないわけでもないし。

銃を消し、三メートルはある槍へと装備を変更する。

鋭い刃を備えた、刺すことよりも斬ることに重点を置いたその槍を

握り、ゴル＝ゴロスへと駆ける。今回この槍には刺すほうで役だってもらおう。

「くらえッ！」

槍の切っ先がゴル＝ゴロスの身体の中心に突き刺さるように構え、攻撃可能範囲に入った瞬間に槍を突き出す。

「だっかっらっ……力任せじゃムリだっって言ってるじゃん」

呆れた様子のゴル＝ゴロスは再び指二本を使って槍の切っ先を掴んだ。腕を前に突き出して。

……これ待ってたんだよ。

私は槍の柄を掴んでいた手を緩め、刃のほうに向かって滑らした。同時に身体を前へと進める。ゴル＝ゴロスの掌に私の手が届く距離まで近づくと、

「これは受け止められる？」

微笑みながらゴル＝ゴロスの掌に銃口を押し当てた。

「……！」

ゴル＝ゴロスの顔が青ざめるのがはっきりとわかった。

……でももう遅い。

私は躊躇いもなく、引き金を引いた。

バンッ！ という音が静まった空間に響き渡り、

「ぐああああああッ……！」

銃声が止むと、入れ代わるかのようにゴル＝ゴロスの叫び声が響いた。

その顔は痛みに歪み、さっきまでの笑みは消えていた。

「うっつ……」

ゴル＝ゴロスの掌にできた穴からは赤黒い血が流れ出し、垂れ下がった手を伝って、指先からばたばたと地面に落ちていき、黒いシミ

を作っていた。

一般プレイヤーはどんな攻撃を受けても、痛みはあるがPCボディに傷を負うことはない。しかし、NPCはそんなことないらしい。

「やっぱり至近距離からの攻撃は避けられないか」

予想が当たり、こいつをどう殺せばいいかがわかった。

「くう……」

「戦闘中によそ見は死を意味する」

椅子にうずくまり、手を押さえた隙だらけの神様の額に銃口を突き付けて、私はそう言った。

「まさかこんなに早く決着がつくとは思わなかった」

「……奇遇だね。僕もそう思ったよ」

無表情で告げた私の言葉にゴル「ゴロスは弱々しい笑みを見せながら答えた。

「……私に神を殺させるのはなにが目的？」

ニヤルラトテツブが言っていたこの世界から助かる条件。

この世界の邪神を殺すこと。

まるで私に成し遂げてほしいかのような言い振りだった。

私がそれを遂げたときになにかがあるのか、またはなにが起こるのか……

……気になって仕方なかった。

「教えるわけにはいかないよ。でもヒントならあげる」

「ヒント？」

「一つめ。真の目覚めを迎えるには一度死ななければならない。二つめ。今のところ僕たちは単なる糧でしかない。……クリユウに理解できるかな？ クスクスクス」

まるで小さい子供に意地悪なクイズを出して、子供が悩んでいる様子を見て楽しんでいる大人みたいな表情でゴル「ゴロスはそこで一旦区切ると、

「じゃあね、クリユウ。真の目覚めを迎えたら、また会おうよ」

そう続けて、

「！！ お前何をつ…………！」

私の言葉が言い終わらないうちに、ゴル＝ゴロスは自分に突き付けられた、私の握っている銃を掴む。

そして私の指が掛かったトリガーに自身の親指を掛けると……………。

……………。

自分の命を絶つその拳銃を、自ら発砲させた。

「やっと一人目が殺されましたか」

ニャラトテップは嬉しそうに呟いた。

重厚さを醸し出している玉座に足を組み、ひじ掛けを使って頬杖をついて座っているその姿は、まるで暇を持て余した王のようだった。

「クトウルフ。……あれ」は拾ってきましたか？」

ニャラトテップがそう言うと、彼の正面に、空間の歪み^{ゆが}が出現し、そこから一人の人物が現れる。

「……もちろんだ。これは俺達^{かなめ}の要だからな」

そう言いながら歪みから現れたクトウルフは手にしているものをニャラトテップに投げ渡した。

「これでやつと一つですか……。まだまだ時間がかかりそうですね」

投げ渡されたそれをニャラトテップはしげしげと眺める。

それは一握りの大きさの透明な石で、内側から青色に輝くその様子は、見た者の心を奪うには十分過ぎる美しさだった。

（これがあと何個必要になるのか……）

ニャラトテップはそう思いながら、石を透かしてその向こう側を見る。

そこにいるのは十数人の“この世界の住人”旧支配者。グレートオールドワンとも呼ばれる存在だった。

（まあ、まだこれだけいるから大丈夫ですかねえ）

“這い寄る混沌”は石を握りしめ、笑う。

「さて、ワタシもまた動くことにしますか……」

そう呟いたニャラトテップは玉座から立ち上がった。

「アイツに会いに行くのか？」

その様子を見ていたクトウルフがニャラトテップに疑問をぶつける。

「そうですよ。愛しい愛しいクリユウちゃんに会いに行くんですよ。まさか焼き餅でも妬いているんですか？」

「何を言っているんだお前は？」

冷やかそうとしていることが目に見えてわかる言い方でニャルラトテップが口にした言葉に、クトウルフはなんでもないことのように無表情で返事を返した。

「反応がつかまらないですよ。もっと面白い反応を期待していたのに」「俺にはお前が何を言っているかがわからない」

「これだからNPCはイヤになっちゃいますねえ……………まあ、ワタシもNPCなんですけど」

無表情のクトウルフのつまらなさに、ニャルラトテップはため息をもらす。

「貴方みたいな堅物に面白みを期待したワタシがバカでしたよ。本来の目的に移ることにします」

ニャルラトテップはそう言うつと自分の胸に手を当てる。

「……………さて問題です。ワタシの異名はなんでしょう？」

「……………“ 這い寄る混沌 ”だ」

突然の問い掛けにクトウルフはすぐ答えることができなかったが、しばらくの沈黙の後に答えを口にする。

「正解です。……………ただしそれは正解の中の一つでしかない」

クククツ、とニャルラトテップはそこで一度笑うと、さらに言葉を続ける。

「ワタシには他にも異名があるんですから。“ 千の顔を持つ者 ”とか」

そう言い終えた瞬間、ニャルラトテップの身体を闇が包み込む。

どんなものも触れることを許さず、なにかもを拒絶する混沌より生まれた闇は、しばらくすると消え去り、一人の人物がその場所に佇んでいた。……………しかし、その人物はニャルラトテップではなく、銀髪のロングヘアーにキャスケットを被り、革製の軽装に身を包んだ少女だった。

「どう？ クリユウに挑戦状でも出すかのように胸は大きくしてみたわ」

「何が“どう？”だ。どうもなにもないぞ」

「つまんな……」

相変わらずのクトウルフの反応の薄さに、少女へと姿を変えたニヤルラトテツプは呆れる。

「やっぱクトウルフはつまらない。クールキャラの一点張りじゃあ人気なんてでないわよ」

「相変わらず俺にはお前が何を言っているのかがわからないな」

「クズね」

「勝手に言っただけいい。……それより、正体をわかっているのに何故喋り方を変えている？」

「それはもちろん心からこのワタシを演じるためよ。……ちなみにこのときのワタシはナイアって名前だから、そこそこよろしく」

「そうか」

「つままない反応やめい」

「知ったことか」

クトウルフはそこでやり取りを中断し、玉座から離れていく。無駄な話をする気はないらしい。

ナイアはそのクトウルフを見て、ため息をつき、やれやれといった様子で首を横に振った。

「まあいいや。それじゃあワタシはクリユウと遊んでくる」

「目的を忘れるな」

「当たり前じゃない！ちゃんとクリユウを神殺しへと誘導してくるから！」

クトウルフの注意に明るく元気に答えたナイアは、

「クリユウがどんなふうな反応を示すか楽しみ！とりあえずクトウルフみたいなつまらない反応は絶対ないわ！」

と、それだけ言い捨てると、一瞬のうちに闇に包まれ姿を消した。

……………。

.....。

少しの静寂の後、クトゥルフはナイアが消えた場所を見つめ、

「.....ピエロめ」

と、吐き捨てるように言うと、彼もまた姿を消した。

惨事……？

「……………」

アンタルクトス山から帰ってきた自分は、マイホームでお湯を張った湯舟に入りながら、ただポーツと呆けていた。

いくら自分でも、自ら頭を撃ち抜く場面をこの目で見て動揺しないことはない。

「……はあ」

ため息がもれる。

データの世界だと侮^{あな}っていたけど、“中身”までとことん作り込まれているのどうかと思う。

……いや、自分がゴル＝ゴロスの掌に穴を開けたときに血が流れ出したことから、薄々気づいていたんだ。ただあの時はゴル＝ゴロスを倒すことばかり考えていたからそっちにそこまで意識がいつてなかったただだった。

……………」

制作者は何を考えて中まで作りこんだのだろうか？　いくらなんでもリアルすぎてやめる人間が続出しそう……。

……………」

「ん？　でも……………」

別にNPCの中身が見えたからやめた、なんて話は聞いたことがない。もしかしたら世界が変わったときに、痛みと共に新たに追加された現象なのかも。

そう考えると少しだけ気が楽になる。世界がもとに戻ればその現象もなくなるかもしれないから。

「……出よ」

ちよつとだけ気持ちが楽になったので、お風呂から出ようと腰をあげたら……………」

「とつげきー！」

浴室の扉が勢いよく開き、元気でうるさいのが一匹入り込んできた。
「とおりや〜！」

そのうるさいのは見事なまでのジャンピングダイブを自分が入っている小さな浴槽に決めてきた。

その勢いでバシャーンとお湯が周囲に飛散し、自分は頭からそのお湯を被った。

若干乾いていた髪が再び水分を含み、毛先から水滴が滴る。

「……………なんでディアがここにいるの？」

犬が濡れた身体から水分を飛ばすときのような感じで首を左右に振ってあちこちに水分を飛ばすディアに自分はそう聞いた。自分で聞いていてもわかるぐらいに疲れた声だった。

「クリユウのマイホームのキーを使って入ってみたら浴室の電気が点いてたから突撃してみた！」

「……………そう」

なんという迷惑。

「じゃあ自分が出るから」

そう口にして自分は腰をあげた。

「だーめー！」

しかしディアはその言葉を否定し、自分の腕を引っつかんだ。そして同時に勢いよく引っ張ったので、体勢が崩れ、浴槽の底で足が滑り転びかける。

「うわっ！ 危なっ！」

間一髪で踏み止まってセーフ。

心臓がすごくドキドキする。怪我を負ってなくても寿命が縮んだよ、これ。

「アタシが出るまで出ちゃ、めっ！ だよっ！」

なにが「めっ！」よ…………。

「あゝ、わかったわかった。で、何分くらいかかるの？」

「二十分。アタシは長風呂派なのだ〜」

「……………出ていい？」

「めっ！」

「はいはい……」

そんなわけで長いお風呂に付き合わされることになった。……のぼせる。

「クリユウ……」

ディアが入浴開始してから一分後。背中を自分のほうに向けて座っている、静かになったディアがしんみりとした様子で自分の名前を呼ぶ。

「なに？」

「クリユウってさ……」

「うん、自分が？」

「いくらなんでも胸小さすぎない？ もうちょっと大きくクリエー
トできたんじゃない？」

「……………」

ひねひね。

「いたっ！ なに捻^{ひね}ってるの！？」

「ワケは言わなくてもわかるでしょ？」

「わかるけど、だって……」

そこまで言ってディアは振り返って自分の胸に手をあて、そしてディア自身の胸に手をあて、なにかを確かめると、

「だってアタシのほうが、」

「それ以上言ったら殺すよ」

「わかりましたっ！！」

自分の声に込められた殺気を感じ取ったらしいディアは、威勢のいい返事をしたあとまた背中を自分に向けると静かになった。

……………。

……………。

「クリユウ……」

再び一分経過し、ディアが自分の名前を呼ぶ。

「なに？ また失礼なこと口にしたら本気で殴るよ」

長風呂に対する耐久度が限界に到達しそうな危険な状態にある自分は、不機嫌さを隠すこともなく言葉を発する。

「……いや、熱い。出たい」

しかし返ってきたのは自分以上に危険な状態であろうと予想できる弱々しい声だった。

「……まだ五分すら経ってないんだけど」

入浴時間二十分って言うってたのはどのだれですか？

「アタシは基本、ぬるま湯で二十分なんだよ」

「ぬるま湯って……何度？」

「さんじゅろくど……」

体温！？……ってそんなことに驚いてる場合じゃない！

ディアは頭がフラフラと揺れており、一目でヤバいことが理解できた。これは早々にお風呂から出さないとまずい。

「ほら！ 捕まって！」

自分はディアを背負って立ち上がる。

浴槽を出たときに限界に達していた自分に目眩が起こったが、ディアを助けるため、しゃがみなくなる衝動を抑えて浴室を脱出。とりあえず涼しいリビングへと移動する。

「あう……」

「うう……。あたまがクラクラする……」

自分が巻いてあげたバスタオル一枚を装備し、フラフラになりながら部屋の中をフラフラしているディアをよそに、自分のはぼせ上がりすぎて床に崩れ落ちていた。ディアを浴室から救い出してバスタオルを巻いてあげたところで、のぼせに対する限界を越えたらしい。動きたくない。

頭がクラクラして視界が安定しない。うう……気持ち悪い……。

「くりゆう、フラフラするよ」

近くにいないはずのディアの声がものすごく遠くから聞こえる。うう……、ダメだ……。気分悪くて死んじやいそう……。

「おーい、クリユウ。おじやまするぞ」

Next God

「いやー、死にかけた」

「本当にごめんなさい！ ごめんなさい！」

「いや、そんなに謝らなくてもいいって」

「そんなわけにはいかない！ 自分が悪かったの！ 本当にごめんなさい！」

「だからいいって」

自分は今、リユートに向かって渾身の土下座を幾度となく繰り返しています。額を床に擦りつけています。

自分の裸を見られたとき、恥ずかしさから咄嗟に大剣をリユートへと放^{ほう}つてしまい、それがグサリと刺さってしまつて、危うくリユートを殺してしまうところだった。

すぐさま回復魔法を連発して応急処置はしたが、意識を取り戻したのは一時間後だった。

「本当にごめんなさい！」

額を床に擦りつける。

「いや、だからもういいって。怒ってないし許すから」

リユートは苦笑いを浮かべながら自分のことをなだめてくる。

「でも痛かつたでしょ？」

「俺、死ぬんだな……、って思った」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「だからもういいからー！」

しつこ過ぎて怒られた……。

「うう、わかつた」

自分が謝るのをやめると、リユートは「やっと終わった……」と言いたそうな疲れた顔をして、椅子に崩れるように座った。

「クリユウって結構しつこいね」

リユートが座っている席の、テーブルを挟んだ向かい側の席に座つ

ているディアがどうでもよさそうな口調で呟く。

「そんなことよりクリュウ、ドリンクプリーズ」

“どうでもよさそう”じゃなくて本当にどうでもいいみたい。

「ディアはリユートに裸を見られて恥ずかしいの？」

テーブルに突っ伏して、床にギリギリ届いていない足をぷらぷらとしながら、あっけらかんとしているディアを見て、そんな疑問が口から出る。

「アタシ、タオル巻いてたもん！」

いや、そういう問題じゃないと思うんだけど……。

「別にリアルの身体を見られてるわけじゃないからいいじゃん！」

なんか得意げに宣^{のたま}っているけど、だからそういう問題じゃ……。

「……なんかもういいや」

ディアの言ってること聞いてたら、「あまり気にすることじゃないのかな？」とか思えてきちゃった。

「で、飲み物は何にするの？」

仕方ないのでディアの注文を承^{うけたまわ}ることにする。

「カプチーノ！」

ディアが挙げる必要もない手を挙げて、元気良く飲み物の名称を挙げる。

「……飲めるの？」

ディアには不釣り合い。

「なんとなくカッコイイと思って言ってみました！」

「はいはい、ジュースね。……リユートは何にする？」

「コーヒー頼むわ」

「わかった。じゃあちよつと待ってて」

二人にそう言っ、自分はキッチンに向かう。自分はココアにしよ。

「ねえ、リユート……」

クリュウがキッチンに向かい、姿が見えなくなっただけでディアが俺を呼ぶ。めちゃくちゃやる気のない声で。

「ん、なんだ？」

テーブルに突っ伏してぐったりしているディアに、椅子の背もたれに寄り掛かっているぐったりしている俺。人ん家でただけだからってんだ、と自分でも思うぐったりさだな。俺の声にもやる気がこもってねー。

まあ、そんな思考は置いて、ディアの発言に耳を傾けることにする。

「クリュウってさ」

「クリュウがなんだ？」

俺もディアも相変わらずのやる気のこもらない声だな。

「べったんこ……だよね」

「……………」

受け答えしにくいときって無視してもオッケーっすよねー。否定しなくてもクリュウには悪いが否定できん。

「……………」

「むし？」

不機嫌そうな表情で俺を見るな。

「どうせ話すならもっと真面目な話をしようって思ったりしましよ
うよ？」

ディアとの会話の方向性を真面目なほうへと切り替えるため、自分を遜へりくたつてお願いする。

こう見えても俺のほうが年下……。なんか悲しくなるな。

「ん。じゃあね……」

俺のお願いが聞き入れられたらしく、ディアは腕を組んで唸りだした。誘導作戦成功だな。

「クリュウってさ……」

うむ。またクリュウの話か。

そんなことを思ったとき、クリュウが消えていったキッチンからガ

ラスか陶器が割れるような音と、「あ——っ！！」というクリユウの叫び声が聞こえてくる。

「なんでドジなんだろうね……」

「そんな明らかに残念がるなよ」

「だってあんなにカッコイイのにアレじゃあさ。アタシはカッコイイクリユウが好きなんだよ」

「クリユウ自身のことなんだからディアが文句言えることじゃないだろ。それに、普段完璧な人がたまにドジったりするとギャップがあつていいと思うぞ」

「ギャップ……。リユートってクリユウに対してギャップ萌えを感じたことがあるの？」

そんなことがふと湧いたようで、瞳をパチクリしながら俺に聞いてきた。

なんだその疑問は……。いや、まあその質問が出てきたのは俺の発言が原因なんだが……。

「別に感じねーぞ。友達に萌えるとかないな」

「“友達”ってことは恋人になることもないと？」

また変な質問を。

何を期待しているか知らんが、俺は平然と答えてやった。

「ないな。それに……」

俺はそこで口を閉じる。

「それに……？」

俺が途中で止めたその先を聞こうと、ディアが俺の言ったことを繰り返したが、「なんでもねーよ」と言つて、その詮索を断ち切る。

「……………」

友達か……。

なに言つてんだ、俺。俺にそんなこと言える資格は微塵もないのに……。

なにがあつたかは知らないが、クリユウの中でなにかが変わって、あいつはリアルに帰ろうとしている。

俺はそれを手伝う。クリユウを助きたいし、俺にもリアルに帰る意味があるから。そして罪滅ぼしのためにも……。

俺の目的が終わるまで、俺はクリユウの友達でいる資格は……ない。

「持ってきたよー」

自分はコーヒーにココア、それにジュースを注いだ三つのコップを持って、ディアとリュートが待っているリビングへと入った。
ん、ディアもリュートもすごいだらけてる。

「はい」

テーブルに突っ伏しているディアの前にジュースを、椅子にだらけて座ってるリュートの前にコーヒーを置く。自分は……、ディアの隣に座ろう。

そんなわけでディアの隣の椅子に座ったところで、

「クリユウ、砂糖とミルクは？」

リュートに、コーヒーにはあって当たり前のものについて聞かれた。

「あ……」

忘れてた……。

「ちよつと取ってくる」

すぐさまキッチンへゴー。コーヒー用の砂糖は……、どこだっけ？
ここだっけ？

とりあえずそこら辺をがちゃがちゃ探してみる。自分はコーヒー飲まないからどこに置いたか覚えてない。

「……………ん、あったあった」

そこら一帯を漁っていると、キッチンにあった引き出しの一つの中にコーヒー用のミルクと角砂糖が置いてあるのを発見。

使うのはリュートだけなので、角砂糖が入ったガラスの容器とミルクを数個掴んでリビングへと戻った。

「お待たせ」

自分は砂糖とミルクをコーヒーカップのすぐそばに置いて、ディアの隣に戻る。

「あながと」

リユートは自分にお礼を言うと、砂糖とミルクをコーヒーに入れはじめた。自分はなんとなくその光景を見てた。
角砂糖を三つ、ミルクを二つ。

「……………」

しかし、入れ終わったリユートは飲もうとしない。ミルクが入って茶色になったコーヒーの表面を黙って見ていた。

「なあクリユウ……………」

そしてまたリユートに呼ばれる。

「掻き混ぜるスプーンかなんか、ねーの？」

「あっ！」

もう自分でも呆れる。やっぱり自分ってドジ…………。

「もう一回行ってくる」

「お菓子もよろしく」

ディアに追加注文もされてキッチンに向かう。

スプーンと、適当にお菓子を皿に乗せてリビングへ。

「もうなにもないよね？」

スプーンをリユートに渡し、テーブルの真ん中にお菓子を置いて、確認の声を呼びかける。座ってからまたなんか言われたら立つのが面倒臭い。

「別にないな」

「ないよ」

二人とも別にないらしかったので安堵してディアの隣に座った。

「本当にクリユウってどこか抜けてるよな」

「うんうん」

「う、うるさい」

リユートとディアがからかってきたのを否定できなかっただったので、それだけ言っただけでココアを一口飲んでやり過ごす。

「そ、そんなことよりリユートとディアはどうしてマイホームに来たの？」

話を逸らすため、とりあえず話題を変える。リユートならなにかちやんとした理由があると思うけど、どうせディアは深い理由はないだろう。

「アタシはなんとなく！」

元気いっぱいディアが答える。……やっぱりね。

「俺は新たな神の情報をクリユウに伝えに来たってところだなー」

なんかとても重要なことを、どうでもよさそうな感じで口にしてる。「なんでそんな大切なことを早く伝えないの？」

リユートがマイホームに来てからも三時間くらい経過してるんだけど。これなら、情報を聞いて明日にでも行ける準備といったほうがよかったよ。

「死に直面してたから仕方ない」

リユートは納得したように首を縦に振る。うう、なんも言えない。

「ねえねえ、神って？」

自分とリユートの会話を聞いたディアが、興味津々で自分に聞いてきた。そういえばディアにはなにも言ってなかったつけ。

「リアルに帰るために神を倒さないといけないでしょ？ その神の情報」

簡潔に説明する。……簡潔？ そのまんまな気が……。というよりこんな当たり前のことを聞いてこないでほしい。

「へ」

しかしディアは、理解してるのかしてないのかわかりにくい反応を示した。

「で、その神の情報は？」

仕方ないので、ディアは置いてくことにしてリユートから情報の続きを聞くことにする。

「実はな。神についてめちゃくちゃ知識を持ってるやつが情報を提供してくれて、いろんな神について、浅い知識だけど仕入れること

「ができたんだ。どうだ凄いだろっ」

威張ってるところ悪いけど、凄いのにはリユートじゃなくてその情報提供者じゃん。口にはしないけど。

リユートが話を続ける。

「そんなわけで、いろんな神の名前がわかってきたぞ。シユブニグラス、ウボニサスラ、クトウルフ、イタクア、クトウグア、ツアトウグア、ツアール、ロイガーとか、他にもかなり多く。居場所とか」

「……なんかその提供者、怪しくない？」

様々な情報を集められるリユートですらわからなかった神の名前や居場所。それを知ってるのはこのゲームの関係者か、または今のゲームの支配者か。

自分は後者の気がしてなかった。

ニヤラトテップが、自分に神を殺させるために情報提供しているとは思えない。

「見た目は悪そうなやつじゃなかったぞ。俺らと同年くらいの、キャスケット被った活発そうな女の子だったな」

リユートがコーヒーを一口飲む。

「女の子だったの？」

「そうそう。『万物の武器を扱う者』って異名を持つ三大プレイヤーの一人に憧れてるってよ。よかったな」

「冷やかさないでよ」

その異名……いつから呼ばれてたっけ。

三大プレイヤーが存在しているといことをこの世界のほぼすべてのプレイヤーは知っているが、三大プレイヤーの名前まで知っているプレイヤーはごく僅かだ。これはゲームの管理者側が三大プレイヤーを決めたときに名前を発表せず、そのプレイヤーに異名をつけて、それで発表したからだ。

どんな目的があってそんな発表をしたのかわからないけど、そのおかげで静かに暮らせているのは有り難かった。いろんなプレイヤー

に絡まれて時間を無駄にするなんてしたくない……。

……で、思考回路を本題に戻すけど、キャスケットを被った女の子だからニヤラトテップが自分を誘導している可能性は低くなった。まだ、ニヤラトテップが第三者を使つて自分を誘導してきた可能性も考えられないけど、そんなに疑つても真実はわからないし、どうせ誘導だとしても自分は神を殺すのはやめない。

「じゃあ、次に自分が相手にする神について教えてくれる？」

「よしきた」

待つてましたと言わんばかりにリユートが得意げに話し出す。

「次にクリユウが相手にするのは“ツアール”と“ロイガー”。“忌まわしき双子”と異名を持った二人組だ」

「いきなりハードル高くない？」

数は一つでも多いとそれだけ有利に働く。強さに大差がないならなおさらだ。

「ああ」

しかしリユートは、自分の疑問に普通に納得する。

「納得しないでよ……」

呆れる。自分に苦戦を強いるつもりだろうか……。

「まあまあ。クリユウが本気を出せば全然問題ないだろ？」

「平然と言つてるところ悪いけど、本気でも二人を相手はムリ」

「いやいや、本気つて本当に“本気の本気”だからな。それならなんの問題もないだろうが」

リユートは納得した様子で再びコーヒーを一口分、口に含む。

「確かにあれを使えば大丈夫だと思うけど……」

でもあれつてチートと変わりないから使いたくないんだよね。

「使いたくないとか言つてる場合じゃないだろ。命がかかってるんだし、相手だつてチートレベルじゃないか」

自分の胸中をリユートが見抜く。

「本当に危険な状況になったら使うよ」

リユートが言うことにも一理あるので、最悪の場合は使うことにし

よう。

「とまあ、次の目的が決まったところで帰りますか」

リユートが椅子に座った状態で、伸びをしながらそう口にした。そのあとに大きなあくびを一つ。

そういえばもう十時過ぎてる。いろいろあったり話したりで結構時間経ってるなー。

「アタシは今日泊まっていっく」

許可を出した覚えはないのに、ディアはさっきまでと同じだらけた姿で呟いた。

「別に構わないよ」

そして、断る理由もないから許可しとく。

「そうかー。んじゃ、またなー」

リユートは立ち上がってから、また大きく伸びをすると別れの挨拶を口にして家から出ていった。

「クリユウ」

いつのまにかディアが自分の身体に抱き着いてくる。

「なに？」

「ねる」

「はいはい」

目がシヨボシヨボしているディアを見て、その様子に微笑みながら返事を返す。

準備があるから早く寝よう。

自分はそう思っで、ディアと一緒にベッドに横になった。

「ふわあ、おやすみクリユウ……」

「おやすみ、ディア……」

明日も神殺し。

ツァールとロイガーはどんな存在なのだろうか……。どのくらい強いのだろうか……。

自分はそんなことを考えながら、眠りへと落ちていった。

不穏な影

「ぐ……あ……」

一人の男がドサリと倒れる。服装は軽装で、職業はシーフだと見て取れる。……この世界で見た目と職業に関係性はないが。

「マジかよ……」

「ありえねえ、こんなこと……」

「PCは傷を負わないんじゃないのかよ!？」

軽装男が倒れるまでの一連の流れを見ていた男三人が、信じられないものを見るような表情で倒れた男を凝視していた。まるでその男から目を離すことができない、といったような様子だった。

……そうなるのも当然か。

この世界ではPCボディに傷がつくことはない、というルールが存在している。それなのに倒れた男はそのルールに反し、身体は真っ黒に焼け焦げ、さらには擦り傷のような跡が至るところについていた。

これは隠されたルールの改変。ほとんどの者が気づくことのできない新たなルール。

ゲームの支配者側が決めた特別な存在は、PCボディだろうと背景グラフィックスだろうと傷つけることができる。

「オイオイ。もう終わりか？ つまんねえなあ、もっと愉しませろよ」

夜の荒野。不自然に辺りを照らす炎の海の中を一人の少年が男たちに向かい近づいてくる。

灰を被ったような髪の色に、赤い絵の具に黒い絵の具を混ぜたような濁った瞳の色。

異質。

どんな場所にしようと馴染むことのないその色合いと雰囲気、その言葉はピッタリと当てはまっていた。

つまらないと言いながらも愉快そうに口の端を上げている少年が倒れている男を踏み付ける。執拗に。死んだことが確定した現在でも「おっと。『オモチャ』は消える時間か……」

死体相手にじやれていた少年が気づいたように呟く。

倒れた男の身体が白い光を帯びていく。通常ならばこの後にPCはタウンへと転送されるが、世界が変わった今では、その身体はクリーチャーと同様に世界へと散る。もう戻ってくることはない。

男が消えていく様子を眺めていた少年の表情は無表情で何を考えているのかはわからなかったが、男が完全に消えると再び愉快そうな微笑を浮かべる。

「さあて、新しい『オモチャ』でも手に入れるか」

わざとらしく、その愉快そうな表情を見せつけるように、少年は顔を男たちへと向けた。

「ヒイツー!!」

男たちは恐怖で顔を引き攣らせる。きっと少年には敵わないと痛感しているのだろう。

しかしそれでも生への執着か。三人の内の一人が、少年に背を向け逃亡を試みた。

それに釣られ、二人も同時に走り出す。

「ハッハッハッ！ 逃げる逃げるッ！ 無抵抗よりかはおもしれえッ！」

少年は笑い、叫ぶと、獲物を追う猟犬の如く三人の男を捕らえに動く。

少年の足がついた地面で小さな爆発が起きる。

その爆発は見た目に反し強く、爆発時に生じた勢いを利用し、少年は一番近い男との距離をものの数秒で縮めると、男の首を掴む。

「おいおい。もう捕まえちゃったよ」

呆れたように呟く。

「——！」

男の表情は恐怖に強張ったが、次の瞬間には全身が火に包まれて燃え上がった。

死は確定。叫ぶ時間すら与えない。

「さて……、次はどっちだ？」

焼け焦げて真っ黒になった死体を投げ捨て、少年は次の標的を決める。

二人の男は今起きた一瞬の出来事から視線を逸らすことができず、足を止めていたが、残忍さを隠すこともしない少年の表情を一瞥すると、恐怖から逃げるため再び走り出した。

「そんな速さじゃ逃げられねえよッ！」

不敵に笑った少年は、両手の平をを地面にたたきつける。

すると地面の三力所から、先の尖った石柱が土を突き破り地表へと顔を出した。

それは突き出た三力所の中心点にいた男へ向かい、そして、……突き刺す。

「——ッ！」

石柱は鳩尾^{みぞおち}、脇腹、そして心臓を貫き、その場に赤黒い液体をしたたかせたオブジェを完成させた。

「ハッハッハッ！ あとひとりはどう痛め付けてやろうか！」

心の底から愉しみを満喫している少年がそう叫びながら手にしたのは、氷の刀。

それは白い冷気を発し、周囲の気温を下げていく。

「ヒッ！」

怖じけづいた男は腰を抜き、地面にへたりこむ。

「最後の最後でそいつはねえよ。拍子抜けだぜエ？」

嫌らしい笑みを浮かべながら少年は、地面にへたりこんでいる最後の男へと近づいていく。

「や、やめてくれ！ 殺さないでくれ！」

後退りしながら必死に生に縋る男を見て、少年は「みっともねえな」

と呟きながら、ゴミでも見るような目で男を一瞥し、氷の刀を構えた。

「クズは消えろ」

少年はそれだけを口にすると、白い冷気を発し、周囲の気温を下げるほどの氷結の刀を、男の胸に突き刺した。

「ッ——！」

突き刺さった箇所から男の身体が凍っていく。それはたったの数秒で男の身体を氷塊へと変えた。

「世界に散れ」

少年は足を上げ、氷塊へと姿を変えた男を勢いよく踏み付けた。

氷結した血や肉、人体を形成しているすべての物質が、その衝撃で粉々に砕け、少年が口にしたとおりに荒れ果てた大地へと広がる。

唯一、形がはつきりと残っていたのは、恐怖に歪んだ表情を浮かべている頭だけだった。

……。

「……つまらねえ」

さっきまでの愉快そうだったのが嘘だったかのように、数秒の間^まの後に少年は呟いた。

「……オイ。そのテメエ、出てこい」

……。

「黙ってんじやねえよ。気配が隠れてねえぞ」

……そこまでバカじゃないみたいね。

「ワタシの気配を感じ取れなかったら期待ハズレだったけど、さすが三大プレイヤーのひとり。そんなことはなかったわね」

姿を消していたワタシは、自分を隠していた闇から外へと足を踏み出す。これでワタシの姿が少年に見えるようになった。

「そこらへんの一般プレイヤーとは違うみたいだな、テメエ」

ワタシが闇の中から現れたのを見て、ワタシが特別な存在だという

ことを少年は悟つたらしい。理解が早いやつは好きだよ、ワタシは。「だったらどうするの？」

答えはわかっていても一応聞いてみることにした。次に返ってくるのは「オレを愉ませろ」ね、確実に。

「簡単だ。オレを愉ませろ」

ビンゴ！ ナイアさんプラス三十点！

「残念ながらワタシは“人狩りの魔導師”さんを満足させるためにここに来たわけじゃないの。ゴメンネ」

心の中で、今の状況に合わないくらい喜んでいながら冷静に答える。ここに来たのは、リユートに神に関する情報を教えた後の、帰り途中の寄り道みたいなもの。ちょっとした偵察だ。それと情報提供。だから戦う気は毛頭ない。

「テメエにその気がなくてもこっちはあんだよ」

少年が呟いたあと、彼の背後に闇の渦が現れ、そこからのびる無数の黒い鞭がワタシへと向かってくる。

もちろんそんなのがワタシに当たることはなく、目の前で消えるんだけど。

「アンタも言ったとおり、ワタシは一般プレイヤーじゃない。そんなもの当たりさえしないよ」

「チッ」

ワタシの発言が嘘じゃないことを理解した少年は舌打ちをすると、つまらなそうにそっぽを向いた。

気持ちが態度にありありと出るタイプの人間ね。

「まあ、ワタシが愉しませることをしないかわりに、他にアンタを愉しませることができるプレイヤーを紹介しましょう」

ワタシは場に似合わないくらいに明るくそう言くと、虚空から光るカケラを出現させ、少年へと放り投げた。

「なんだこれ？」

少年はめちやくちや訝いぶかしげにワタシが渡したものを眺める。

「まあまあ。とりあえず見てみなさいな」

アイテムの使用を促す。

訝しげなままワタシとアイテムを交互に見遣っていた少年は、腰にぶら下がっている鏡に触れると、現れたウィンドウの“p i c t u r e 1”と表示されているアイテムを選んだ。

現れたのはアイテム名のとおり一枚の画像。

そこに映っているのは、黒一色の服で身を包んでいる、男の子に見える少女。

「誰だコイツ？」

少年は当然の疑問をワタシにぶつけてくる。

「“万物の武器を扱う者”って言えばわかるでしょ？」

ワタシは、自分でもわかるほどに妖艶に微笑みながらその言葉を口にした。

「ハッ、なるほどな……」

少年は鼻で笑い、そのまま少しの時間が経過した後、言葉を続けた。

「……それで、テメエの目的はなんだ？ どうしてこんな情報をオレに与える？」

間髪を容れずにワタシは答えを返す。

「貴方と同じ。ワタシを愉しませてほしいの」

ワタシはニツコリと笑う。これほどウザい笑みはきつとないだろうな。自分でもわかるわ。

「チッ、気に喰わねえが仕方ねえ。テメエの思い通りに動いてやるよ」

予想通り、少年はウザそうな顔を見ると、アーカムと荒野を繋いでいる転送装置の方向へと歩きだした。

「すぐにやられないでね。いくらなんでもそんなのじゃつまらなすぎるから」

「ハッ、ナメてんのか……。オレが負けるわけねえだろうが……」
何言ってるの？ アンタみたいのがクリュウに勝てるわけないでしょう、クククッ。

「期待してるわ」

どす黒い笑みを心の中で浮かべながら、ワタシは欠片ほども思っていない言葉を平然と口にする、背後に現れた闇へと身を沈める。二人の戦いの間に何が生まれるのか……。ワタシですら予想ができないからとても楽しみだ。

ワタシは、ひとり愉快に微笑しながら闇もろとも姿を消した。

廃都アラオザル

「ここが『廃都アラオザル』……」

リユートからツアールとロイガーの居場所を聞き出した自分は、たった今、その場所である廃都アラオザルへと足を踏み入れた。砂漠の真ん中に存在するアラオザルは廃都という名に相応しく、レンガ造りの建築物は崩れ、残っているのは壁だったと思われるレンガの一部と、どこからでも生えている屈強な雑草くらいだった。

「……………」

澄み渡たる青空の下で、朽ち果てたこの都を眺めていると、心の中に悲しみが沸いて来る。……そんな気持ちにさせる風景だった。

「行くか……」

湿っぽくなってしまった気持ちをその一言で振り払い、自分は都の中心を目指す。

周囲は異様なほど静寂に満ちており、自分の足が地面を踏む音が自分の横を通り過ぎていく風の音ぐらいしか耳に入らない。

「本当に何もない……」

歩きながら辺りを見渡すが、朽ち果てた建築物以外はこれといって目立つものがない。

敵らしき存在の影も見当たらず、なんだかまた誘い込まれているような気さえしてくる。

「……………」

しかし、都の中心が間近に迫ったとき、なにかの音が聞こえた。空耳とも考えたが、二度目の音の発生がその可能性を否定する。

陶器を硬いもので叩いたときに出るような乾いた音が数度、静かな世界に響く。音からして、きっとそこら辺に転がっているレンガ同士をぶつけているか、レンガに硬いなかをぶつけているのだろう。

だが、いったい誰が……。

当然だが、自分の頭の中にその疑問が浮かぶ。もしツァールとロイガーを殺しに来たっていう無謀なバカだったらいいけど、その確率はゼロに果てしなく近い。期待するのも無意味なのが確定的だ。

「無駄な戦闘は避けたいんだけど……」

自分は物音がする方向を判断し、慎重に近づいていくことにした。言ったとおり、これから強敵と戦うことになるのだから体力は温存したい。けれど放置することで後々、ツァールとロイガー戦に介入してこれたら厄介以外の何物でもない。だから今のうちに手を打つ。

移動を行いながら思考の糸をまとめあげる。

音がするのは、自分の右側にある壁の向こうからだった。

「はあ……」

ため息が漏れた。なぜなら、この壁の向こうが、自分が目指していた、都の中心になる城だからだ。つまりそこに敵がいるということとは、ソイツを避けて通ることができない。

避けることは諦めることにして、相手がどんな存在かを確認するために、壁に身を隠しながら城の入り口前を窺う。^{うかが}

「……あれは何？」

しかし、そこにいたのは自分でもわからない存在。自分が一度も見ることがなければ聞いたこともない存在だった。

皮膚は黒く、コウモリのような飛膜のついた前足、長く尖った尻尾を持ち、そして顔がない四つん這いの生物。そんな異形な存在が、指先の鋭い爪でレンガを弄^{もてあそ}んでいた。

「……………」

判断に迷う。あんなよくわからないヤツを相手にしていいんだろうか……。

「でも戦うしかないか」

自分に理解できない存在だが、そんなことを言っている場合ではなかった。あそこにいられると邪魔だ。それに邪神を相手にしているのに、今更こんなやつに迷っても仕方がない。

幸いなことに、その黒いのは一体だけだった。そこから、倒すのは楽だろう、という判断を下す。

自分は虚空から二メートル強の大鎌を出現させると、柄^{つか}を握りしめ、名前も知らないクリーチャーへと駆ける。

自分が飛び出した瞬間に相手もこちらに気づき、威嚇目的らしい、黒板を爪で引っ掻いたときのような耳障りな鳴き声をあげた。

「不快だから、……黙れ！」

自分は力任せに大鎌を右から左へと薙ぎ払う。

しかし、クリーチャーは素早く後ろに飛び退き、自分の大鎌は空を切った。

自分は落ち着いたままクリーチャーとの距離を縮めると、同時に、刃を左向きにして構えていた大鎌の向きを逆にし、今度は左から右へと薙ぎ払う。

その攻撃は再び後方へと避けられた。

「すばしっこいな」

感想を漏らしながら自分は武器を構え直すと、次は上へ翳^{かざ}して勢いよく振り下ろした。

クリーチャーはやすやすとその攻撃を横に飛び退いて避けると、自分の後方上空へと飛んでいく。

「逃がすかつ！」

勢いよく振り返る。ここまで来たら絶対に仕留めてやる。

……。

……。

……えっ？

意気込みながら勢いよく振り返った自分は、自身の目を疑った。朽ち果てる前は最低でも三階建てだったと思われる建築物の、壁の崩れた一、二階、……そして吹きさらしの最上階を、黒い存在がびっしりと覆い尽くしている。その数は百を軽く越えていた。

いつの間にこんなに……。というよりどこからこれだけの数が……。

さっきまで静寂に包まれていたはずの都が、全身の毛が逆立つような不快な音に支配される。

「なに、この数……」

呆然としながら周囲を見回すと、前方だけでなく後ろや横、至るところにそいつらは存在し、自分を取り囲んでいる。

「クソッ！」

最悪な状況に陥ったことを理解する。

下位クラスのティンダロスの猟犬でも苦勞したのに、強さがどれほどかもわからないやつを一度に大勢相手にするのは危険だ。

……だが。

「はあ……。仕方ない。相手してやるよ……」

自分はため息を漏らして首を横に振ると、大鎌を構えた。

確かにこの数すべてを倒すのは無理だろう。しかし、今の状況では逃げることにすままならない。なら、せめて逃げるができるように数を減らす。それが自分の思考がたどり着いた結論だ。

「どいつだろうと一撃で終わらせてやる……！」

大鎌の柄を握りしめ、目の前のクリーチャー一匹へと駆ける。

「これでも喰らえッ！」

大鎌を右から左へ薙ぎ払おうと構える。

「！？」

しかし、その攻撃が行われる前に、黄金に輝く光の矢がクリーチャーを貫いた。

直後、クリーチャーの身体が内側から破裂し、バラバラになった肉体が四方八方に散る。

「何が……！？」

急な出来事に唖然とする。状況を理解することができない。

「あゝあ、待ちくたびれたからこつちから来てあげたわよ」

「ボクは別にまだ待てたけど……」

少女と少年の声が背後から聞こえ、自分は振り返った。

そこにいたのは、十歳前後の少女と少年。ピンク色のショートヘ

アをした勝ち気そうな少女と、水色の髪をした無表情で大人しそうな少年の二人。

「アンタ達は？」

「ワタシたち？　ワタシたちはね……」

自分の質問に、少女は得意げな微笑を浮かべると、自分にも予想ができた言葉を続けた。

「『忌まわしき双子』って呼ばれてる旧支配者よ」

忌まわしき双子

「ワタシが最強で無敵のツアール！　そしてこっちが無愛想でいじってもつまらないロイガーよ！」

「……よろしく」

偉そうに自己紹介をする、ツアールと名乗った少女の言葉に続き、彼女に紹介されたロイガーが何事もなかったかのようにお辞儀をした。

「アンタ達がツアールとロイガー……」

大鎌を構える。見た目は子供だが油断はできない。

「戦う気満々ね！　そうじゃなきゃ楽しくないわ！」

ツアールの笑みは、ただ純粹に戦うことを楽しみにしているものだった。

「ナイトゴント！　クリュウはワタシたちの獲物よ！　立ち去りなさい！」

ツアールが自分達を囲んでいるクリーチャー——ナイトゴントに命令する。従わなければ殺す、とその表情が告げている。

表情の内に秘められた危険性を本能で感じ取ったのか、群れのリーダーらしきナイトゴントが悔しそうな鳴き声を一声あげると、雲ひとつない空へと飛び立つ。他のナイトゴントも後を追うように空の彼方へと飛び去っていった。

「さあ、これで邪魔ものはいなくなっただわ！　思う存分暴れるわよ！　準備して、ロイガー！」

「……わかったよ、ツアール」

はつらつとした姉の掛け声とともに、姉弟二人は虚空から全長一メートルほどの武器を取り出した。きょうだい

二人の取り出した武器は特徴的だが同一の形状をしており、違うところといったら、姉が持っている武器が白を基調としているのに対し、弟が持っているものは黒を基調にしたカラーであることくら

いだった。

「剣……？」

双子の武器は一見すると剣だが、自分はその形に違和感を感じる。刀のように細い刀身は、全体の四分の一ほどで一度外側斜め下へ曲がり、そこから内側に反り返りながら上へと伸びる。まるで、弓を上下で半分にしたような形だ。

「気づいた？ さっすがクリュウ……」

ツァールは面白がりながらロイガーと抱き合うように身を寄せ合うと、双子は武器を持った手を自分へと向けた。

ツァールは武器の刃を上向きに、ロイガーは逆手に持って刃を下向きに構える。

それによって完成したのは、二メートルほどの弓。弦の役割を担うであろう銀色の光が、姉弟の武器を繋ぎ合わせるように、反り返った刀身の先に巻き付く。

「準備オーケー！」

「まだ。……矢をつがえてない。……ツァールはいつも早合点する。悪い癖……」

姉が元気に口にした言葉に弟が注意をし、続けざまにダメ出しをする。

注意されたツァールは、「うっさいわね！ 今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」と自分へのお説教を怒鳴り声で一掃し、「つがえればいいんでしょ！ つがえれば！」と怒気を込めた言葉を続けた。

「……………」

二人のそんなやり取りに、自分は私と妹を重ねてしまい、微笑ましいという感情とともに胸にチクリとした痛みが走った。

そんなことを考えている時じゃないのに、妹のことを思い出してしまう。

『お姉ちゃんは強いけど、おっちょこちよいだから私が支えてあげ

ないよね!』

妹の微笑む顔が思い浮かぶ。私のことを想う最高の笑顔が……。

「ゴメンね、ユウ……」

一年も経ってしまつて今更かもしれないけど、私はユウのもとへと帰る。必ず。

「ロイガー、矢を装填するわよ!」

「……はいはい」

ツアールの言葉に、ロイガーは呆れた様子で同意すると、黄金に輝く光を矢として弓に装填し、二人で弦を引き絞る。

いつでも放つことができるであろう弓矢が自分に向けられる。

戦闘準備は互いに整った。

「さあ、かかつてきなさいクリユウ! コテンパにしてあげる!」

相手の挑発にのる必要はない。まずはあの矢を避けて、次の矢が装填される隙を狙えば……。

対策を講じ、双子を見遣ったとき、ツアールがニヤリと薄く笑った。

直後、自分の目の前の地面が凄まじい轟音とともに決りとられる。

決りとられた地面は自分の後方へと吹き飛び、決りとったときの衝撃が強烈な風圧へと変わり、私の身体を後方へと押す。

「——!? 何が——っ!?」

私の目の前にはいつの間にか小規模のクレーターが出来上がっていた。

何が起きて地面が決りとられたのかわからない。それくらいあっという間の出来事。

「クリユウ、今ので一回死んだわよ」

呆然としながらツアールを見ると、笑いを押し殺すことに必死な様子だった。

弦から離れた左手は腹を抱えており、弓に装填された黄金の矢は、いつの間にかどこかへと消えている。

「まさか……今のが？」

「そうよ。もう『放った』から」

目尻の涙を拭いながら口にしたツアールの一言を信じていることができない。

『速い』とかの次元じゃない。目で追うことができないものを、放たれてから避けるなんて不可能だ。

「チツ……」

私は、すぐさま双子へと向かって駆け出した。

あの弓の攻撃範囲内にいたら、命がいくつあろうと足りない。できるだけ相手に近づいて、矢を放たれないようにしなければ。

「ロイガー、クリュウが突進してきたわよ！」

「……わかってる」

二人が弦を引き絞ると、黄金の光が弓に再装填される。

五メートルばかりの距離が、今は遥かに長い距離に思えた。

あの一撃が放たれる前に双子に近づくのは不可能かつ。

私は双子の指に視線をやる。

二人の指が微かに動いた。

それを確認した自分は、すぐさま真横に飛ぶ。

二度目の矢が、飛ぶ直前に私がいた地面を抉った。

地面を転がった私はすぐに立ち上がると、再び双子へと駆け出した。

「二発目で避けるなんて……さすがクリュウね」

「……感心してる場合じゃない。……どうするの？」

「そんなの簡単でしょ？ ちょこまか動くのは捕まえればいいのよ」

「……ん。……わかった」

ツアールの考えをロイガーが承諾した直後、辺り一帯の風の流れが変わる。

次は何が起こる？

「そこかつ！」

警戒を怠らずに駆けけていた私の左方向から、空気を切り裂く音が

向かってくる。

私は地面を踏み締め、大鎌を左へと薙いだ。

視界に映らない何かを切り裂く感触が、大鎌を通して自分へと伝わってくる。

「……やっぱすごいね」

無表情だが、感心した様子でロイガーが感想を漏らす。

「……でも、次はどうか？」

私の周り、四方八方から、さっきと同じ風を切り裂く音が自分へ向かってくるのを感じる。

しかし、全方向から音が聞こえるため、位置を把握することができない。

「クツソツ……！」

闇雲に大鎌を振り回したが、捉えたのは二つで、他の風は私の身体へと絡み付いた。

「動けない……っ!？」

風は私を宙へと押さえ付け、僅かに動くことすらも不可能とする。ヤバイ！ このままじゃ……！

そう思ったとき、私の隣をものすごい速度で黄金の光が駆け抜けていった。

「今ので二回目よ。クリユウが死んだの」

ツァールが再び笑いを堪えながら、告げる。

「……僕たちに一度も触れずに二回も死んじゃうなんて……、情けない」

ロイガーは呆れたように心情を吐露した。明らかにつまらなそうだった。

……。

「すう……、はあ……」

呆然としていた私は、一度深呼吸をする。一旦気持ちを落ち着かせよう。

私と双子の力の差は歴然。このままじゃ勝つことはおろか、指一

つ触れることすらできない。

ならどうするか……。

答えは一つしかない。

「クスッ」

『ん？』

この状況で私が笑ったのを見て、二人の子どもが訝しげに自分へと視線を移す。

「私を本気にさせたわね……」

微笑を浮かべながら、私は双子を見遣った。

片方は相変わらず無表情だが、もう片方は私の言葉を聞いて、ニヤリと微笑んだ。その様子は「やっと本気を出すのね」と言わんばかりだ。

「本当なら使いたくはなかったんだけど……」

自分の左目が燃えるように熱くなっていく。嫌にならない心地好い感覚が左目から脳へと広がっていく。

「ロイガー、クリウウの左目が黒からシルバーに変わったわ」

「……ボクも見てるからわかるよ。……戦闘体勢に入ろう」

「そうね」

私の見た目だけではない変化に気づいた忌まわしき双子が、戦闘準備を整えはじめた。

……そう。万全に準備してもらわないとすぐに終わる。

期待をしながら私は、自分を縛る風の縄を壊すことにした。

「イージス展開……」

私が呟くと、碧い光が私を中心にして膨らんでいき、私以外のすべてを外へと追い出す。

「弾ける」

私を囲む防御壁は命令通り弾け、発生した爆風は、風でできた縄を蹴散らす。

地面に降り立った私は、虚空に手を翳した。

次元の壁を引き裂き現れた武器の柄を掴むと、鞘から抜くように

引き抜いた。

「マスターウェポン……」

この世界に姿を現した、悪魔の羽根を模した剣は、禍々しさを漂わせていながら、美しさも備え、邪神ばかりが蔓延^{はびこ}るこの世界に相応しい姿を形成している。

この武器を使うのはいつ以来だろうか……。確か、三大プレイヤーに認定されたときにいつの間にか所持していて、使ってみたところ、強すぎて使う気が起きなくなったとき以来か。

マスターウェポンを構える。

「さあ、かかつてきな」

「そんな武器を手にしたところで、私たちの高速を超える矢を避けることなんて出来ないわ!」

私の挑発に、ツアールとロイガーは弓に装填された黄金の矢を放った。

「避ける?」

ツアールの言葉を鼻で笑い、蹴散らす。

……そんなもの、避ける必要すらない。

手にした剣が姿を変える。

楯へと変貌したマスターウェポンは、高速を超える矢を受け止め、微小な衝撃すらも私に伝えることを許さない。

これがマスターウェポンの力。どんな武具にも瞬時に変わることができる能力。

「ボクたちの攻撃を防いだ!？」

無表情だったロイガーを驚かせるほど、今の出来事は衝撃的だったらしい。

「次は私の番だ」

楯を剣に戻した自分はツアールとロイガーへと駆け出した。

「どうにかして反撃を……!」

双子はお互いの武器を解体すると、弓から剣へと変わった武器を構え、応戦の体勢に入った。

「それでも……喰らえ！」

ロイガーの突きを身を翻して避けた自分は、ロイガーの腕を掴み、背後に回り込むと、その首に刃を押し当てた。

「チエックメイト」

私の一言にツアールの動きが止まった。

「チッ」

悔しそうに舌打ちをすると、手にした武器を横に放り投げる。

ロイガーも武器を地面に落とした。

「ワタシたちの完璧な負けよ。殺しなさい」

ツアールは不機嫌そうに呟いた。……が、

「いいえ。殺さないわ」

私はマスターウエポンを虚空へと帰すと、ロイガーを放した。

ツアールとロイガーは驚いた様子で私を見てくる。

「クリユウ、アンタ本気で言ってるの！？　ワタシたちを殺さなきゃ、リアルには帰れないのよ！」

「わかってる」

「なら、何で！？」

「二人が悪い神に見えなかったから……」

苦笑しながら、私はツアールの疑問に答えてあげた。

ただ戦うことが好きなだけの、仲のいい姉弟にしか見えなくて……。

……それに、二人に私とユウを重ねてしまったから。

「私、ここまでワクワクして楽しかった勝負は久しぶり。そんな勝負の楽しさを思い出させてくれた二人を殺すなんてできないよ」

「クリユウ、……アンタってバカね」

「……バカだね」

二人の呆れたような様子に苦笑する。

「……でも、リアルに帰る方法はどつするの？」

ロイガーが当然の疑問を口にした。

「閉じ込めたのがニヤルラトテップ自身によってだったら、ボコボ

「コにしてもログアウトを使用できるようにさせるわ」

「……クリュウならやりかねない」

「そうね」

「それじゃあ自分はアーカムに帰ることにするから。あなたたちみたいに悪くない神様もいることが知れてよかったよ」

私は二人へと微笑みながら、その場をあとにしようとした。

「そんなことが許されるとでも思っているのか？」

しかし、突然どこからその声が聞こえてきた。

「ちよっ！ 何すんのよ！ やめなさい！」

背後から何かを拒絶するツァールの声が聞こえ、振り返ると、そこには……。

「クトウルフ……」

旧支配者の筆頭であるクトウルフが、ツァールの首に刀の刃を押し当てていた。

「アンタ、何を……」

「クリュウが始末をしないのなら、俺が殺^やるしかない」

「何言ってるのよ！ それじゃあ意味がないでしょ！」

クトウルフの言葉にツァールが怒鳴る。『意味』とは、なんのことだ？

「仕方がないことだ。どうせクリュウにお前達を殺す気がないのなら、生きていようと俺が殺しても、どちらだろうと変わりはないからな」

「そんなことはさせない」

ただ淡々と語るクトウルフに苛立ちを覚え、私は虚空から大剣を取り出し、構える。

「どんな理由があっても、二人を殺させはしない」

二人はもう私にとって友達だ。だから友達を傷つけさせるわけにはいかない。

「フン、相手になろう」

クトウルフはツァールを抱えると、腰にささっている刀を一本抜き取った。

私はクトウルフへ駆け寄り、剣を上から振り下ろす。

しかし、全体重を込めた重い一撃を、クトウルフは細い刀で軽々とした様子で受け止めた。

クトウルフは、ただ刀を上にも構えただけの姿勢で立っており、手に力を込めている様子は微塵もない。それなのにどうして……。

「終わりか？」

「えっ？」

「この程度で、世界一の実力者が……。笑わせてくれる」

クトウルフは一度刀を引くと、押し出すように刀を私の大剣にぶつけた。

「なっ！」

まるで背後から重力によって引つ張られるように、自分の身体が吹き飛ぶ。

地面の上を転がり、クトウルフとの距離が十メートルほど開く。

……なんて力だ。アイツは本当に私が倒したことのあるクトウルフか？

「世界が変わる以前は、力が抑えられていたことによってお前に負けたが、力が解放された今では、お前はとるに足らない存在ではない」

私の思考を読み取ったクトウルフが告げる。私では自分に勝てない。

「……クリュウ、クトウルフの言うとおりだ。……敵わない」

ロイガーも冷酷に告げた。それほどにクトウルフの力は強大らしかった。……でも。

「私は諦めない。絶対ツァールを救う」

大剣をしまい、スピアへと武器をチェンジする。

私は逃げたりしない。そう心に決めたんだ。

「行くぞッ！」

私はクトウルフへと向かっていく。

「お前に救うことはできない。お前がするのは殺すことだけだ」

「そんなことはない！」

「それはどうだろうな……」

私がスピアをクトウルフに突き刺そうとした瞬間、クトウルフがツアールを正面に掲げた。

「――！」

武器をどうにかしなければ、と思ったときにはもう遅かった。

ツアールの心臓をスピアが貫く。

「ツアールッ！」

ロイガーが叫ぶ。

クトウルフがツアールを放すと、ツアールは地面に崩れ落ち、人形のように動かない。

「ツアールッ！」

ツアールのもとへと駆け寄ったロイガーは何度も姉の名を呼びながら、彼女の身体を激しく揺すった。

「ロイ……ガー……」

「ツアール！？」

「ワタシは……これで、無駄死にじゃなくて……糧に……なれる……の？」

ツアールは最後の力を使って、搾り出すように言葉を紡いでいく。

「そうだよ！ ツアールの死は無駄にはならないよ！」

「なら……よかった……」

弟の言葉に微笑んだ姉は、そのまま、眠るようにして動かなくなった。

「うつ……、うつ……」

もう動かない姉に縋り付きながら、顔や手が血だらけになることも気にせずに、ロイガーはひたすらに泣く。

「……私が……ツアールを……」

自分の手を見る。護りたかったものを自分から消してしまったこの手を。

「クリユウ……」

「っ！」

ロイガーに名前を呼ばれ、身が竦む。

姉を殺した私を恨んだのではないだろうか、と誤ってしまい、顔を上げることができない。

「クリユウ……顔を上げて」

ロイガーに言われて、私は力無く顔を上げた。

ロイガーの表情は、私が想像していたものとは違っていた。

目尻から涙を一筋流し、私に微笑んでいた。恨みなんてものは一欠片もなく、邪神と呼ばれているのが嘘のような笑顔だった。

「クリユウは悪くないよ。……そしてクトウルフも。……一応やっ
てることは正しいから」

「その通りだ」

ロイガーの言葉をクトウルフが認める。

「でもね……。やってることが正しくても、やり方に問題があるんだよ」

ロイガーはクトウルフを睨みつけると武器を出現させ構えた。自身の武器と姉の武器を持ち、その刃をクトウルフへ向ける。

「俺とやるのか？」

「こんなやり方で糧を集めるなんて許さない」

「私も手伝う」

ロイガーの隣に立ち、私も大鎌を構える。

「そうか……。ならば一つ教えることがある」

クトウルフは人差し指を立て、無表情に言葉を続けた。

「残念だが、ツアールの死は無駄だ」

「なに？ ツアールは糧になったんじゃない……」

ロイガーが驚きの表情を浮かべる。

クトウルフはロイガーの反応を無視して、さらに続ける。

「お前達双子は二人で一つ。つまり……わかるな？」

最後はロイガーを諭すように、クトウルフは告げた。

「そういうことか……。よくわかったよ……。クトウルフが最低な奴ってことが……」

ロイガーは何かを理解したように呟くと、「クリユウ……」と私を呼んだ。

「なに、ロイガー……」

クトウルフを睨みつけながら返事をする。

しかし、ロイガーの口から続いた言葉に私は驚き、視線をそちらへと移した。

「ボクを殺して」

「えっ？ 何を言って、」

「いいからボクを殺して。そうじゃなきゃ、ツアールの死は無駄になる」

「いや、でも……」

私は必死に思考を巡らせ、何か言おうと試みる。しかし、言葉の続きは何一つ出てこなかった。

「ボクもクリユウに殺されないと糧になれない。……大丈夫。ツアールと一緒に死ねことも怖くないから」

「で、でも！」

そうは言われても、そんなことできるわけが、

「できるか、できないかじゃない。殺して」

「い、嫌だ……」

「ボクを殺せえええええっ！」

ロイガーの悲痛な叫びが、私に大鎌を振り上げさせた。

「ゴメンね。嫌な思いをさせて……」

そう言い残したロイガーに、……私は大鎌を振り下ろした。

「これで双子は救われた」

「うるさい、黙れ」

思ってもいないことを平気に口にしたクソ野郎を、殺気を込めた一言で黙らせる。

「お前を絶対に許さない」

「ならばどうする？」

平然とした様子で私をあしらう神に本気で頭にきた。殺さないと気が済まない！

「お前の中身を今すぐここにブチ撒けてやるッ！」

「やれるものならやってみろ」

「やってやるよ！」

その挑発に乗って、私は剣を形成したマスターウェポンを握り、クトウルフへと走り出した。

「感情に身を任せるとは……。愚かだな」

クトウルフは腰にさした刀の柄を掴むと、「影牙……^{えいが}」と、ただそれだけを呟いた。

直後、私の体中を目に見えない何かが切り裂く。

まるで、何百という刃が、同時に私の身体を斬りつけたような感覚。

体中から血が噴き出し、クトウルフへと駆けていた足は止まり、その場に倒れる。

「……………」

指を微かに動かす程度にしか力を込められない。それだけのダメージを負ったことに気づく。そして、クトウルフがそれだけの力を持つていることを。

視界の隅で、クトウルフがツァールとロイガーのもとへ歩み寄っていた。

クトウルフは、横たわっている双子に手を置く。

すると、二人の身体は細かい粒子となり、世界へと消えていった。残ったのは、ツァールのピンクとロイガーのスカイブルーを混ぜ

て出来上がったような、薄紫色をした結晶だけだった。

「クリユウ、お前はただの道具でしかない。世界が新たな目覚めを迎えるためのな」

クトウルフは結晶を手にとると、それだけを言い残し、突然現れた闇の中へと姿を消した。

「くそ……」

身体を動かすことができない私は、その光景を眺めながら、悔しさを募らせることしか出来なかった。

心の傷はさらに多く

「また不愉快な決着のつきかただった……」

クトウルフに身体をボロボロにされ、動けるほどに傷が癒えた自分は、アラオザルからアーカムへと戻ってきていた。

この世界では、死なない限りどんなに酷い怪我だろうと治癒する。度合いにより、治るまでの時間は比例するが。

「……………」

空を仰ぎ見る。

アラオザルの空は青く澄み渡っていて綺麗だったが、今のアーカムの空は、如実に自分の心を表していた。

普段より低い空は、跳躍すれば手が届くのではないだろうか、というほど近くに感じる。

「はぁ……………」

雨が降り出すことはないだろうが、今の状態を長い間維持するであろう空を見上げながら、自分はマイホームへ向かってゆっくりと歩き続けた。

心の中で考えていることは、ツァールとロイガーを救うことが出来なかった自分への後悔と嫌悪感だけだった。

人探し

「うぐっ……！」

少女が口から血を吐く。

「オイ、コイツを知ってるか？」

血を吐いた少女の前で、彼女に一枚の画像を見せているのは、夜の荒野で三人のプレイヤーをたやすく死に追い詰めた少年だった。

「早く言わねえと、死ぬぞ？」

人通りのない路地裏で少年は少女の腹部に短刀を突き刺し、尋問を行っていた。

「し、知らない……。そんなプレイヤー、知らない……。だからお願い……。抜いて……」

少女は額を汗でびっしょりと濡らし、痛みで歪んだ表情で必死に少年へと頼み込む。

腹部からは血が溢れ、少女の服と少年の手を真っ赤に染める。服に吸収されなかった血液は地面へと滴り、小さな赤い水溜まりを徐々に大きくしていった。

「チッ、知らねえのかよ。使えねえなあ」

呆れたように長いため息をついた少年は、むしろくしゃとした様子で頭をぶつきらばうに掻くと、しばらくの間物思いに耽^{ふけ}った。

「……チッ、仕方ねえな。使いもんにならねえヤツに用はねえ……」
「じゃあ……、解放してくれるの……？」

少女の顔に、希望の光が灯る。その表情には、やっと助かる、という安堵を読み取ることができた。

「使えないヤツに用はない。だから死ぬ」

「……え？」

しかし、少年の言葉に、少女の目は見開かれ、その顔が恐怖と絶望に覆われた。

少年は短刀を回しながら、少女の肉へと深々と掬込み、百八十度

短刀を回転させた。

「——ッ！」

広がった傷口からは、さらに多くの血液が流れ、服の赤い染みが大きくなる。

「い、いたい……、いたいから……、やめて……ください……」

「なに言っただメエ……。痛くしてやってんだから痛いのが当たり前だろうが」

痛みに耐え切れず懇願する少女に、少年は平然とした態度で言い返すと、短刀を彼女から引き抜き、血液で赤く輝くそれを少女の胸に当てた。

「じゃあなッ！」

少年は、すべての力を腕に込め、一息に心臓を突き刺した。

「ッ——！」

心臓をひと突きされた少女は、一度目を見開くと、徐々にそれは閉じていき、最後は完全に目をつぶった。

「使えねえ……」

操作の糸が切れたPCボディは、少年へともたれ掛かる。

「邪魔だ」

少年はその抜け殻を、無造作に横に倒した。

地面に倒れた少女の腹部からは、血液が溢れ、少女を中心にして段々と広がっていく。その池の真ん中で横たわる少女はもう動かない。

「三人目だけ収穫なし……。さすが運営側のセキュリティはしっかりしてやがる」

少年は皮肉めいた言葉を呟くと、大きな通りに向かって歩きだした。

「さあて、次はどいつから聞き出すか……。……ん？」

少年が次の標的を決めようとしていたその時、少年の視界をとある人物が横切った。

「……オイオイ、見つけちゃったぜ」

少年は薄ら笑いを浮かべると、その人物へと歩み寄っていった。

wizard of murder

殺気を感じ取るのに、そう時間はかからなかった。

自分は、振り向きざまに虚空から細長い剣を出現させた。

白い冷気を纏って飛んできた巨大な氷塊を、その剣で縦一直線に切り裂く。真つ二つになった氷塊はタイル張りの道に転がった。通行の邪魔だ……。

「……急に襲われるようなことをした覚えはないけど、……どちら様？」

「オイオイ……。声にやる気が込もってねえぞ」

絶対零度の氷塊が発生させている白い冷気の中を、一人の少年が歩いてくる。

白に近い灰色の髪に、濁った赤眼……。一目で異質なことがわかる容姿だ。

一度でも見たら印象に強く残るであろうその姿は、自分の記憶をいくらまさぐっても見つからなかった。つまり一度も会ったことはない。なのにどうして、この少年は自分に敵意を剥き出しにしているのか……。

「戦いは楽しまねえと……」

少年は微笑を浮かべながら両脇に転がっている氷塊に手を置くと、その氷の中に指を減り込ませた。

メキメキという音をたてながら、掴んだ氷を剥がしていく。

「バトル……スタートだ」

少年はそう呟くと、氷の塊から剥がしとった粗削りな氷剣二つを私へと突き刺そうとして、切っ先を突き出す。

「そんなの当たらないよ」

バックステップで少年からの攻撃を避けた私は、相手を逆撫でする言葉を口にしながら相手との距離を広げる。

相手が二本で来るなら、こっちも二本だ。

さっきまで持っていた剣を右手に持ち替え、左手に新たな剣を出現させる。

右手に持ったただ細長いだけのシンプルな形をした剣とは違い、^{さめ}鯨の鋭い歯のような小さな刃が、ノコギリのようにいくつもついた剣を握る。氷を削るのにピッタリな剣だ。それに相手に刺されば内臓を引きずり出すこともできる。……そんな光景、見たくもないけど。

「さて、名前を聞いても無視するようなヤツには、……お仕置きが必要だね」

私は力強く地面を蹴った。少年から一度広げた距離を、そのひと蹴りで一気に縮める。まずは、一度受けた攻撃をやり返す。

少年との距離が一メートル以内まで縮まったときに、右手に掴んだ剣の切っ先を脇腹目掛けて突き出す。

しかし、その攻撃はさっきの私と同じように後方へとさがること避けられた。

「ようやくその気になったか……」

少年が嬉しそうに、だがしかし、見ている者に薄気味悪さを感じさせる笑みを見せた。

「お望み通りオレの名前を教えてやるよッ！」

少年が両手を上空へと持ち上げると、その手に握られた粗削りな二つの氷剣を握り潰す。

粉々になった細かい粒が周囲に飛散する。

「オレはラルフ！ “人狩りの魔導師” って呼ばれてる三大プレイヤーの一人だッ！」

少年——ラルフが叫んだと同時に、彼の周りを舞っていた氷の粒子がラルフの背中に集約していった。

それは塊^{かたまり}や剣のときとは違い透明ではなく、黒き氷となってラルフの背中に翼を形成していく。

砕いた氷剣だけでは飽き足りず、空気中の水蒸気をも凝固させて寄せ集めた翼は、水晶の結晶がいくつも生えたかのようで、少年の

異質な容姿と作用しあい、その神秘的な美しさに磨きがかかる。その姿は、美しくも残酷さを備えた氷の悪魔。

「三大プレイヤー……だつて？」

その言葉を聞いて、私の頬を一筋の汗が伝った。

よりにもよって、私は最悪な奴を相手にまわすことになってしまった。多分、自分が戦った神よりも強い存在……。

「さあ……、楽しもうぜ？」

少年が空へと飛び上がる。低い雲の真下で静止すると、錆びたかのように凍結していた黒き翼がゆっくりと軋みながらその全容を現す。

全長十メートルを越える翼が広がったとき、翼から剥がれた細氷さいひょうが空気中に舞い散った。

「生憎今は曇りじゃねえか……。ツイてねえなア……」

空気中の水分を固めて作り出した氷柱ひちゅうを私へと放りながら、氷翼ひよくの魔導師が戯れ言を口にした。

「ツイてない？ それにしてはあまり残念そうじゃないけど！」

二本の剣で自分へと向かってきた氷柱を薙ぎ払う。……『あまり』じゃなくて『まったく』残念そうに見えない。

「オレは別に残念じゃねえよ。ツイてなくて残念なのはテメエだ」

「は？ 何を言つて……」

「雲が何でできてるか解るよなあ？」

「——！！」

息を飲む。一言で理解できた。ヤツが何をしようとしているのかを！

「わかんねえかもしれないから教えてやるよッ！ 雲つてのは、大気中にまとまって浮遊している水滴とか氷の粒のことを言うんだよッ！」

得意げに喋っていたラルフの言葉を聞き流し、私は予測できる次の攻撃を防ぐ方法を考えていた。

「言つとくが、逃げてるヒマはないぜエッ！！」

そんなことわかってる。逃げるという選択肢を考えるだけ時間のムダにしかない。

「なっ!?!」

辺りを見渡す。身を隠せる場所を探すためだったが、私が驚いたのは隠れる場所がないことじゃなかった。

「いつの間にこんな数のプレイヤーがつ!?!」

私とラルフの後ろの通路には、気づかない間に多くのプレイヤーが集まっていた。その数は優に百を越えている。

プレイヤー達は、その身に迫る危険に気づかない。ただ、空中に浮かぶ美しくも狂った魔導師に心を奪われ、呆然としていた。

「チッ!」

私は走り出した。せめて一人でも救えれば、と思って。

一番近くにいた魔女風な装備に身を固めた少女へと駆ける。それと同時に、両手に持った剣をしまい込み、分厚くて巨大な鉄板をそれらしい形に加工しただけ、と言ってもおかしくない見た目の大剣へと持ち替えた。この剣なら、せめて二人は防げるはずだ。

ラルフが片手を天へと掲げる。

「さあて、防げるか?」

ニタリと笑いながら、ラルフは高く挙げた手を私へと向けて振り下ろした。

直後、雲の中から数え切れないほどの氷柱がアーカムの一角へと降り注ぐ。

それらは地面や建物へと突き刺さり、レンガ造りの黒味を帯びた赤黄色一色のアーカムを青白く塗り替えていった。

「——ッ!——!」

少女の前へとたどり着いた直後に降り注いできた氷柱を防ぐため、大剣を天へと掲げる。数十メートルの高さから落ちてくる氷柱の衝撃は大きく、気を許した瞬間に鋭い先端が私の身体を貫くであろうことが容易に想像できた。

「そんなの……っ!」

こんなところで死ぬわけにはいかない。この娘を守ることもそうだが、私にはやらないといけないことがあるんだ……。

数十秒の間降り続いていた氷柱の雨が止む。

私は降り注ぐ氷柱を防ぐため真上へと持ち上げていた大剣を降ろした。この剣のおかげで私の身体は擦り傷一つ負っていない。

少女の安全を確認しようとして振り返る。しかし、彼女は意識をなくして倒れていた。

私は驚いたが、身体を見たところ怪我を負っている様子はなかった。少し安堵する。

楯として持ち主を守ってくれた剣の表面にこびりついた氷の欠片を、感謝の気持ちを込めながら払い落とし、周囲を見渡した。

「なんて……惨い……」

低かった雲はすべてが氷へと変わり果て、氷柱の代わりに太陽の光が降り注ぐアーカムの街は、そう口にしてしまうほどに酷い有様だった。

太陽の光を浴びて輝く水晶のような氷の柱が、至る所から生えているかのようにして街をうめつくしていた。それらは私たちの闘いを観戦していたプレイヤー達を地へと縫い付け、その命を死へと導く。

氷の突き刺さった傷口からは大量の血液が流れ、透明な結晶の上を流れ落ちていく。その深紅の液体は地面に大きな円形を作るとともに、タイルの溝を伝って様々な方向に広がっていった。

そんな光景がどこに視線を向けようと視界に入り込んできていた。

「無関係のプレイヤーまで巻き込むなんて……」

「危険を顧みずに、『我関せず』って感じで呑気に居残るから悪いんだよ。こういうのを自業自得って言うんだ」

罪の意識が微塵も感じられないラルフの態度に、私の中の怒りが沸々（ふつふつ）と沸き起こる。

「お前は絶対に許さないッ！」

私の左目が熱を帯びる。私の怒りが大きくなるにつれて、それは

比例するように温度を上げていく。

「やっとテメエの本気を見ることができなのか……」

少年が微笑む。「やっと面白くなってきやがった」という気持ちが誰でもわかるほど愉快そうな顔で。

「オレの魔法でテメエを死へと導いてやるよッ！」

ラルフを傍目に、私は虚空から出現させた、大鎌の形を成したマスターウェポンを握る。

刃の全長は私の身長に及び、柄もそれと同等の長さを有する。

「そっちがその気なら、私もアンタの首を刈り取るつもりで闘う……」

大鎌を構える。刃が太陽の光を反射させ、鈍く光った。

「バトル……」

ラルフの言葉に、愉快そうに細い目をした魔導師と、怒りの炎を瞳に宿した戦士が、互いの目を見据えながら、そのあとの言葉を続けた。

『スタートだッ！』

“チカラ”

私は地面を蹴り、空中に留まっているラルフの目の前まで跳躍すると、握った大鎌を薙ぐ。

「んなもん喰らわねえよ！」

氷翼がラルフの身を包み、私の薙いだ大鎌を受け止めた。

「ッ——！」

その黒い氷は硬く、大鎌から伝わってきた衝撃が私の腕を痺れさせる。なんて硬さだ。

「なんだア？ 本気を出したかと思っただらその程度かよ？」

見下しと呆れが表れた目が、私の瞳の奥を覗き込む。

「ナメるな……」

その視線に対する反撃として、私はその瞳を睨みつけた。

ラルフの瞳から視線を逸らさずに、私は地面へと降りる。

空中に留まる力を持たない私には、空中戦は不利でしかない。――

先ずアイツを地に這わせないと。

……。

……。

……まあ、簡単にできるけど。

「さあて、次は何をしてくれるんだ？」

「……余裕を見せ過ぎだよ」

私はラルフの“耳元で”囁いた。

「なにっ!？」

ラルフが私のほうへと振り返る。さっきまで余裕満々に笑っていたのが嘘のように、その表情は驚愕していた。

「転移の魔法を使えば、背後を取るくらい簡単なんだよ」

私は勝ち誇った笑みを浮かべながら、巨人が使うかのような巨大な剣をラルフの身体に打ち付けた。

「……落ちろッ」

「ぐっ……！」

不意打ちに抵抗できなかったラルフは大剣をまともに受け、地面に叩き付けられた。

集中力を必要としていたのか、ラルフが地面へと辿り着いた瞬間に氷翼は溶けていくようにして空中に消えていった。

「クッソ……ッ！」

「何がクソだつて？」

悔しそうな表情で地面から這い上がったラルフの首に、剣の切っ先をつきつける。

「もしかして、これで終わり？」

一瞬で先程までと立場が逆転する。その速さに、ラルフは戸惑っている様子だった。わかりやすい表情だ。

「……なんでだ？ 転移の魔法は移動場所の設定、移動時のモーシヨンで最低でも一秒はかかるのに……」

首に剣を向けられたこの状況でも、納得できないことに対しての疑問が口からこぼれている。しかし、答えは出ない様子だ。

「私の武器の能力スキルさ」

答えが出るのに時間が掛かりそうだったので、私は少し得意げな口調で教えてやることにした。

「この武器の装備中は頭の中で私が思い描いたままに技を使える。モーシヨンとかは必要ないんだ」

「なるほどな。チートってことか。おもしれえ……」

私の説明に納得したラルフがニヤリと笑った。

「こんな状況で笑える余裕があるの？」

「こんなのは、まだまだ余裕の内だ……」

直後、ラルフを取り囲むように四角錐の形をした氷の結晶が地面から生える。細い結晶の先端は鋭く、刺さったらひとたまりもないラルフの近くにいた私は、バックステップで広がってくる結晶を避けた。

「さて、次はオレの番だな……」

いつの間にか立ち上がっていたラルフが不敵な笑みを浮かべていた。

ラルフのその笑みを私は何度も見てきたが、今回の笑みには今まで感じなかった“何か”を感じる。今度はさすがに本気で相手にしない……死ぬ。私の中の何かがそう告げた。

「テメエが管理者側からその武器を貰ったように、オレも管理者側から特別なモンを貰ってんだよッ！」

ラルフが叫んだと同時に、戦闘中に見てきた氷柱の中で最も巨大なものが彼の前方に出現した。

人が十人並んで歩いてもまだ余裕がある通りの道幅と同じ太さをした氷の柱は、さながら天を支える柱であるかのように天へと伸びている。

「あれは……本……？」

その透明な柱の中には一冊の本が埋められていた。

「魔導書『クタアト・アクアデインゲン』……。テメエのチカラをオレに貸しな」

ラルフは氷の中に手を延ばすと、誰が見ても容易に理解できるほどに古く、相当に傷んでいる『クタアト・アクアデインゲン』と呼ばれた魔導書を掴んだ。

ラルフが手を氷柱の中に差し入れた瞬間、柱には無数の亀裂が生じる。それにより、向こう側が透けるほど透明だった柱が、根本から頂点にかけて、別物になっていくかのように白い柱へと変化していった。

「これがオレの“チカラ”だ……」

ラルフは薄笑いを浮かべると、己の力と称した魔導書を勢いよく氷の中から引っ張り出した。

亀裂を生じさせているほど脆くなっていた柱は本を引き抜かれた直後、内側から爆発したかのようにしてそのカケラを宙へと振り撒く。

様々なサイズの氷の破片が空から降り注ぐ。大きめな破片もあつ

たりするが、これくらいなら当たってもかすり傷程度だろう。あまり気にしないでよさそうだ。

そんな思考が終了すると、私はラルフのほうへと向き直った。

半袖にダブダブの長ズボンを履き、けだるそうな表情で、けだるそうに頭の裏をボリボリと掻いている、一般的な女性より細い身体をした少年は、私と目が合うと口の端を僅かに上げた。

「さあ！『水神・クタート』のチカラ、見せ付けてやるよッ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7664n/>

World Of Awakening

2011年10月10日03時01分発行